DIRTY PRETTY THINGS　PEARL JAM　ASIAN KUNG-FU GENERATION

平成16年4月15日第三種郵便物承認　2006年6月18日発行（偶数月1回18日発行）第10巻第3号（通巻65号）［スヌーザー］

snoozer

MAGAZINE FOR GIRLS & BOYS TANGLED UP IN BLUE

6
2006
730YEN

THE VINES

絶望からの生還

LAST DAYS OF

NIRVANA

～カート・コバーン最後の日々～

来日特集!!

ARCTIC MONKEYS
SIGUR RÓS
FRANZ FERDINAND
THE WHITE STRIPES
THE ORDINARY BOYS

002 特集：カート・コバーン最後の日々

006 LAST ALBUM 008 LAST TOUR 010 LAST INTERVIEW

016 LAST DAYS OF KURT COBAIN 018 映画『ラストデイズ』に寄せて

032 THE STREETS ポップ・スター様の日常をテーマにさらなる金もうけ

038 DIRTY PRETTY THINGS カール様、再出発したのに泥酔三昧

046 PEARL JAM キャリア最高傑作! もう陰気で、辛気臭いとは言わせない!!

054 BOOM BOOM SATELLITES 最高傑作なのに、もう次の心配

062 ASIAN KUNG-FU GENERATION 最高傑作なのに、不安げ

070 PRIMAL SCREAM 072 CORINNE BAILY RAE 074 DAFT PUNK

076 MATISYAHU 078 FATBOY SLIM 080 S-QUIZMEN

082 THE VINES
シドニー現地取材敢行!! 絶望からの生還を刻む『ヴィジョン・ヴァリィ』の地平

094 HERBERT 098 REI HARAKAMI

102 BACK DROP BOMB 106 EDITORS

110 THE ZUTONS 114 SNOW PATROL

118 FUTUREHEADS 122 MAMALAID RAG

140 MASSIVE ATTACK 146 SPANK ROCK

150 REGURGITATOR 154 BEAT CRUSADERS

158 CURLY GIRAFFE 162 SOFT 166 VOLA & THE ORIENTAL MACHINE

170 THE CHARLATANS 174 IRVING

182 KEIICH SOKABE WITH KEI IWASAKI (SEKAIICHI)

178 CALEXICO 180 LOSTAGE 186 MATMOS 190 JUNKIE XL

snoozer
ISSUE #056 CONTENTS

SNOOZE IN SNEEZE OUT

024 CLUB SNOOZER　026 NUMBER (N)INE　028 i-WARP

126 THE RACONTEURS　128 MYSTERY JETS

130 TV ON THE RADIO　131 TOWERS OF LONDON

132 THE BEACHES　134 PHOENIX

135 THE SPINTO BAND　136 BEYONDS　139 BE YOUR OWN PET

228 ARCTIC MONKEYS　破けたジーンズとヴァインズへの愛を語る

234 SIGUR RÓS　ピチピチ美少年と年老いた樹木と汚れた人形への愛を語る

238 THE WHITE STRIPES　故郷とかつての友人達への憎悪を語る

246 FRANZ FERDINAND　ドイツ変態音楽とフリークスへの愛を語る

254 THE ORDINARY BOYS　新人セレブ君、キンクスへの愛を語る

258 THE KOOKS　262 EL PRESIDENTE

266 DOPING PANDA　270 DRESDEN DOLLS

274 PET SHOP BOYS　278 THE FLAMING LIPS

282 GRANDADDY　286 THE RODEO CABURETTOR　290 AKEBOSHI

294 MOTORPSYCHO　298 FINK　300 BIG CITY DREAMS

209 RECORDING REVIEWS　222 LIVE REVIEWS

192 LETTERS+NEWS+INFORMATION

久保憲司「二本映画批評」／ドン・マツオ「賢者のブルース」／スヌーザー・サーベイ／「俺リアル」の巣窟／スヌーザー・メディア・ミックス／バックナンバーと定期講読のお知らせ

302 SUBTERRANEAN HOMESICK BLUES

～すべてのブルーにこんがらがったベッドルームのために～

FRONT COVER

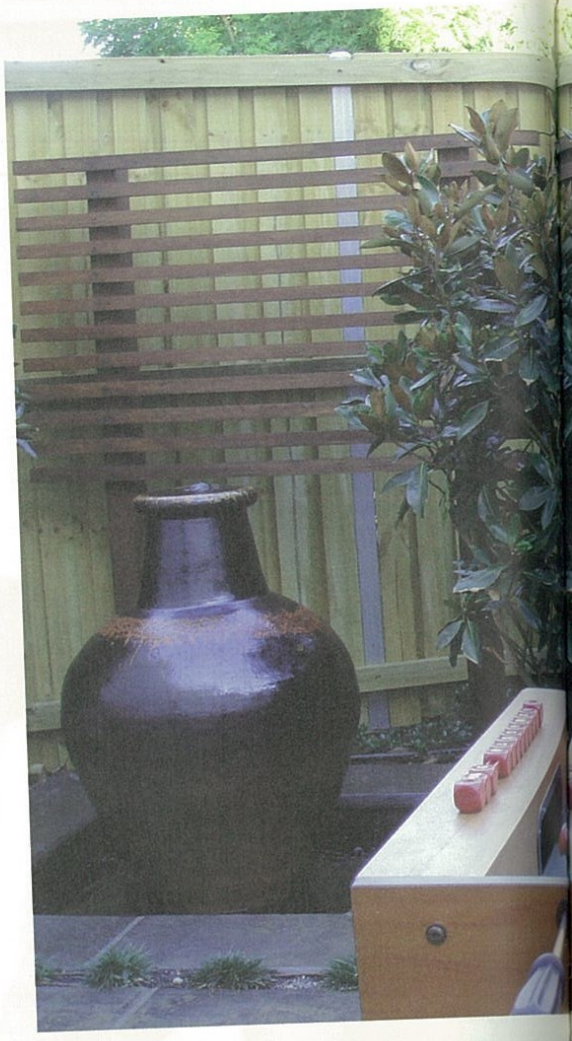
THE VINES BY IAN JENNINGS

今回の表紙のコンセプトは「スター・トレック」。だって、左側にミスター・スポックもいるじゃんよ?――というのが本誌編集長の言い分。まあ少し似てます。しかもこの度、クレイグは「猪八戒」とまで呼ばれました。2年振りの感動の再会となるはずが、思わず「そのジーンズ何号やねん!」と言いそうになったのは事実ですが、猪八戒はひど過ぎ。やっぱり、ライヴって大事ですね。有酸素運動ですから。でも好き。（唐沢真佐子）

THE VINES

BY MASAKO KARASAWA PHOTOGRAPHY BY IAN JENNINGS

真っ暗な闇に覆われた冬の季節を抜けて、遂に彼らが帰還した。
28年間の人生の中で、初めて知ることになった自身の障害。
少年時代からの仲間、家族との離別。記憶の喪失――。
ザ・ヴァインズの3rdアルバム『ヴィジョン・ヴァリイ』は、
フロントマン、クレイグが経験することになった、あまりに壮絶な
痛みと苦しみ、悲しみを、生々しいほどに浮き彫りにする。
そして、それでもなお、音楽を求めて止まなかった彼らの、
力強さと決意と才能とが、13の楽曲となって眩く輝いている。
彼らはいかにして、新しい出発の地平へと辿り着いたのか?
故郷オーストラリアで三人が語った、「空白の2年間」のすべて



3月17日、シドニー。シティから少し西に下った静かな住宅地区に、ザ・ヴァインズのマネジメント・オフィスはある。シドニーの夏はまだ終わりを告げず、小さな裏庭にも真っ白な日差しが差し込み、南国めいた鳥の鳴き声が遠くから聞こえる。とても穏やかで、静かな午後だ。2ndアルバム『ウィニング・デイズ』が完成したばかりの彼らを訪ねて以来だから、ちょうど2年振りになる。そう、再びシドニーにやって来ることが出来た。勿論、ようやく届けられた3rdアルバム『ヴィジョン・ヴァリイ』をヘッドフォンで聴きながら、ザ・ヴァインズと再会するために。

今回、バンドは日本のみならず、世界中の媒体を含めて、ほんの限られた本数の取材にしか答えない。私達としても、当初、予定していたのはフロントマン、クレイグ・ニコルスとの30分程度の電話インタヴューだった。しかし、この新作を実際に聴けば、まさかそんな短い時間ですべてを語れるほどカジュアルで、単純明快な作品でないことはすぐにわかる。それに、この二十数ヵ月の間に、彼らはあまりに辛く、苦い体験をしてきた。その中には訊きにくいことも、答えにくいことも多くあるだろう。だとしたらもう少し長く、話をすることは出来ないだろうか? 出来ることならシドニーで、ちゃんと顔を合わせて話を聞くことは出来ないだろうか?――そんな無茶な申し出が、つい数日前に承諾された。そして、あと30分ほどすれば、三人のメンバーもここにやって来て、久し振りのインタヴューがスタートする。

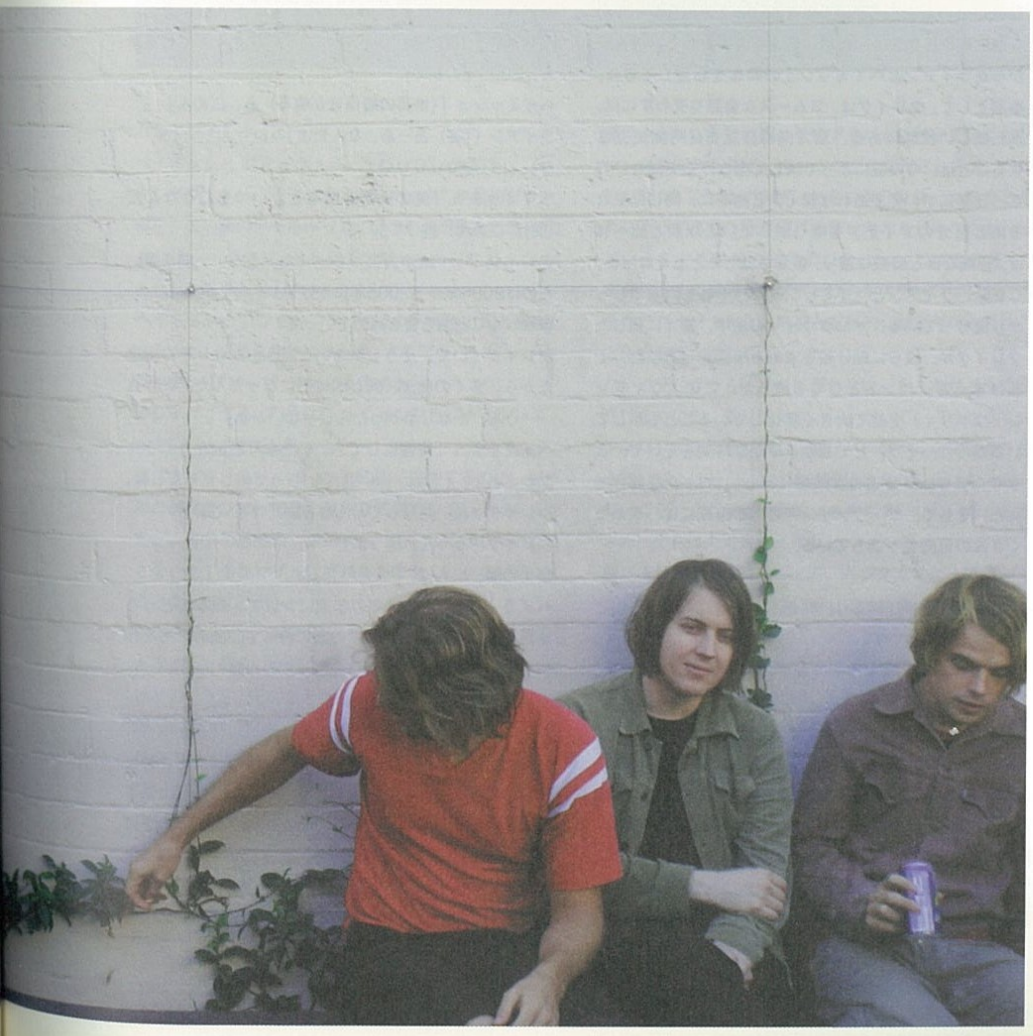
彼らのインタヴューを始める前に、ここ数年、ザ・ヴァインズに一体何が起こったのかを説明しておいた方がいいかもしれない。それには、彼らのことをずっと側で見守り支えてきたマネージャー、アンディ・ケリーの言葉を借りるのが最適だろう。

「先週、遂に〈トリプルM〉から電話がきたんだ。『過去のことは水に流したい。だから、"ドント・リッスン・トゥ・ザ・レディオ"の音源を送ってくれないか』ってね。グレイトだね!」――そんな風に、機嫌良さそうに笑いながらアンディが話しているのは、2年前、シドニー近郊、アナンデールで起きた事件にまつわる話だ。2004年5月、日本ツアーを終えて地元に戻ったバンドは、ラジオ局〈トリプルM〉が主催するライヴ・ステージに立った。そこで、クレイグ・ニコルスは、オーディエンスに向かって散々悪態をつき、たった数曲で演奏を止め、その様子に我慢の限界が尽きたベーシストのパトリック・マシューズは楽器を置き去ったまま、二度とステージにも、バンドにも戻らなかった。そしてまたクレイグは、その日、撮影していたカメラマンに暴行し、カメラを破損した。この事件は後日、裁判にまで持ち込まれ、主催者〈トリプルM〉は彼らの曲を永久にオンエアしないと通告。しかし、その関係性がこの『ヴィジョン・ヴァリィ』を完成させた今、再び修復されつつある、ということをアンディは言っているのだ。――いや、もう少しゆっくり話を進めよう。

この事件は、もう一つの大きな事実を明らかにした。クレイグ・ニコルスが、アスペルガー症候群である、という事実だ。アスペルガー症候群について、ここで簡単に定義付けをするのは難しい。敢えて乱暴に説明するなら、「知能、言語に障害がなく、認知力も正常域の高機能自閉症」。その症状、障害は個人によってまちまちで、決して特定の範疇に限定出来るものではない。人と目を合わせるのを苦痛に感じる人もいれば、電話が苦手な人もいる。人に体を触られると痛みを感じる人もいれば、ある特定の素材の服しか着られないという人もいる。理数系に突出した能力を発揮する人もいれば、音楽や芸術に驚くほどの才能を開花させる人もいる。人それぞれだ。ただ、もっとも多く共通する症状として知られるのは、「ある決まったルーティンを好む/こだわりの行動」と「社会性、コミュニケーションの困難」だという。そう、かつてのクレイグが何故あれほどまでマクドナルドとコーラばかりの食事、マリファナの吸引にこだわったのか。あるいは、見知らぬ土地に行くたびに、極度の混乱を経験しなければならなかったのかを考えた時、アスペルガー症候群という障害は一つの答えとなる。勿論、あの吹きさらしの暴風雨のようだった、2004年の来日公演についても。

「勿論、彼の日本での行動は本当に残念に思ってる。日本の人々は本当に温かく彼らを歓迎してくれたんだからね。ただ残念なことに、彼は世界中のどの国でもあんな風に振る舞ったんだよ(苦笑)。でも文化的に、日本はあの行動が最悪な結果を生む場所だった。ただ……クレイグはその大部分を思い出せないんだ。自分の覚えていない行動を耳にするたびに、彼は後悔してる。彼は

photography by MASAKO KARASAWA



ジェイ・レノの番組も覚えてないし、(デヴィッド・)レターマンの番組も覚えていない。“ゲット・フリー”や“ライド”のヴィデオを観ても、何故自分があんな顔をしていたのかわからないんだ。〈ホームベイク〉だって覚えてないんだよ? あの時期の大きな部分が、彼の記憶から抜けてるんだ」。

その事件の直後、クレイグは事実上起訴される。彼は被告として出廷しなければならず、そこですでに診断が下されていたアスペルガー症候群を、抗弁の一つにしなければならなかった。まだ事件の渦中にある中での、その発表は地元メディアは勿論、世界中を駆け巡ることになる。デビュー以来、彼が起こした幾つかの出来事——例えば、インタヴュアーのテープレコーダーを壊したり、取材が嫌で2時間以上もトイレに閉じこもったり、床に突っ伏したまま動かなくなったりといった、奇妙な行動の理由を、誰もが知りたがったからだ。「彼自身、診断されたことには『ほとんど、ほっとした』って言ってたからね。少なくともそれに名前が付いただけで——自分が他の人とは違う、という事実に対してね。クレイグはずっと、『自分は違う』って感じてたから。でも、そう、彼は診断を……僕らが考えていたよりも、ずっとすんなり受け入れたんだ」。

その後に予定されていた大規模なツアーも含め、すべてのステージをキャンセルし、ザ・ヴァインズは完全な沈黙期間に入る。勿論、それはクレイグが治療に専念するための時間でもあった。「この2年間、一番大切だったのは、クレイグが良くなることだった。正直、僕らにはプロとしての目標はなかったし、彼らがツアーが出来ないことを心配したりもしなかった。クレイグがまたハッピーになって、その上でやっぱり音楽をやりたいと思えるくらい良くなって欲しかった。それが、この2年間の課題だったんだよ。実際、あれはまるで、また上がるために一番下まで落ちなきゃいけない状況だったんだと思う。事実、診断された後、クレイグは良くなる前に一時、もっと悪化したからね」。

アルバム『ヴィジョン・ヴァリイ』には、その当時の彼が負った精神的な、とても生々しい傷跡を見つけることが出来る。「僕がどこに向かってるのか、教えてくれないかな/もう失うものなんて何もないんだ/ぐるぐると廻った挙げ句に、またこの場所に戻ってくるだなんて/笑いがこみあげて仕方ないね」。バンドを組んで世界中を巡り、音楽の熱狂に身を投げ出すことを切望し、ようやくその夢を手に掴みかけた自分は、また結局、この場所に戻ってきてしまった。しかも、懸命に積み上げてきたはずのものもすべて失って——“ナッシンズ・カミン”に書きなぐられた言葉は、まるでかつて自分が持っていた情熱に、唾を吐きかけているようだ。「あの懐かしい天候の土地に、僕を連れて帰って」と望郷を歌う、メロウでアコースティックな、アルバム随一の美しさを持つナンバー“テイク・ミー・バック”ですら、彼は、自分達がすでに過去のバンドとなり、もっともエキサイティングな場所から追い出され、人々から忘れ去られたんだと、その孤独と敗北の念を露にする。そして、アルバム冒頭“エニィサウンド”では、自らを曲りくねり、擦り切れそうになっているブドウの蔦(ヴァイン)に例えながら、こんな風に呟くのだ。「だらだらと過ぎ去っていく時間の中で、僕はずっと落ち込んでいる/ねえ、何でもいいんだ、音を聴かせて/もう殺してほしい、だって僕は死んでしまっているんだから」——そう、この

“ナッシンズ・カミン”は、最初に書いた曲なんだ。あの時の僕は、ネガティヴな気持ちだったと思う。「もうこのままなんじゃないか?」って思ったり、自分がこれから何をするのかもわからなかったり。ただ……僕は、悲しんでたんだ。上手く言えないんだけど、そこには希望もなくて、未来もなくて。だから、あの曲は“どこでもない場所”についてなんだ。何もないんだよ。だから“ナッシンズ”なんだ

ラインはとても大切なことを語っている。もう一度その手に音楽を掴みたいという微かな疼き、たった一つの希望を求めて、ザ・ヴァインズはゆっくりと再生を始め、『ヴィジョン・ヴァリィ』というアルバムは産声をあげたのだ。

「本当にゆっくりとしたプロセスだったんだよ」と、アンディは当時の様子を振り返る。「その頃、僕らがやっていたのは、単に彼を励まし続けることじゃないかな。例えば、『新しい曲は書いた?』とか、『今はどうしてる?』って声をかけ続けて、家に訪ねて。可笑しいのは、彼、ずっとDATテープをポケットに入れて持ち歩いてたんだ(笑)。でも最初は『それ何? 何か入ってる? 聴いてもいい?』って訊いても、『うーん、どうかな。わかんない……』って感じで。で、とうとう僕ともう一人のパートナーが彼の家に行って、座って、ヘッドフォンを渡された。それを交互に使って、2曲ほど聴かせてもらったんだ(笑)。あれが、ある意味スタートだったな。それからクレイグに曲の話をし続けて、すると彼も、『本当にこのアルバムが作りたいんだ』って言うようになった。『すごくダイレクトで、これまで作った中で最高のアルバムにしたい』って」。

そして、誰からも期待されることのない、空白の時間を経過して、ザ・ヴァインズの3rdアルバム『ヴィジョン・ヴァリイ』は産み落とされた。漆黒の闇の中に一粒の涙がこぼれ落ちているアートワークは、クレイグ本人によれば、「聴く人の作品に対するイメージを邪魔しないようにするため」だと言う。しかし、すべての希望と未来を断たれ、彼の唯一の安住の場所であったはずの音楽すらもその手から失いかけていた彼の、この2年間を描写する方法は、真っ黒な色で塗りつぶすより他になかったのかもしれない。

アルバムに収められているのは、たった31分にして13の楽曲。そのいずれもが、これまでになくダイレクトで、とても力強い。それは勿論、端的で、フックに溢れた2分台の曲を書くことにかけては天武の才を持った、彼の本領が存分に発揮された結果と言えるだろう。歌詞の内容は深く内省へと向かっているが、奏でられる音の数々はシャープで軽やかだ。シンプルであるが故に、その曲のポイントは明確に絞られ、無駄なものは一音も一小節もない。“ドント・リッスン・トゥ・ザ・レディオ”や“キャンディ・デイズ”に漂う、やわらかな日差しのようなサイケデリア。深い安堵と切なさの中に吸い込まれるような、“ヴィジョン・ヴァリィ”の幻想的な響き。“ゴーイング・ゴーン”は、すべての涙を流し尽くした後のような、静謐さをもたたえている。そして、瞬間にして闇を切り裂くようなロック・チューン、“ドープ・トレイン”、“F*K YEH”、“グロス・アウト”。アルバム最後を飾る6分を越える、バンド史上もっとも壮大なサイケデリック・シンフォニー“スペースシップ”に至るまで一曲を残すことなく、ただザ・ヴァインズらしい。4年前、初めての取材で、彼が「僕はずっと、グレイトなアルバムを作り続ける。だって、僕らはこれから先、自分達の音楽について他のバンドの名前を使われることなく、僕ら自身の名前で呼ばれなきゃいけないんだから!」と、期待と興奮に満ちた様子で語っていたことを思い出す。

さあ、約束の時間となった。時間通りに到着したのは、ドラムのヘイミッシュ。でかい図体と笑顔の豪快さは相変わらずだ。ただ、足下に目をやると、左足のひざ下からプラスチックの器具が取り付けられている。サーフィンで怪我をしたらしい。アンディ、ヘイミッシュと雑談をしつつ、あとの二人を待つ。20分ほどを過ぎた頃、ドアが静かに開いた。ライアンの後ろから、クレイグが小さく「やあ」と挨拶する。だいぶ髪が伸びたし、まあ正直、だいぶ体形も変わった。でも、照れ臭そうに、ぎこちなく下を向いて笑うクセは以前のままだ。「僕、もらった『スヌーザー』は、全部とっておいてあるんだ」。

これまで何度かクレイグを相手にインタヴューをしてきたが、バンド・メンバー全員が揃うのは今回が初めて。何故なら、これまで、クレイグは自分の音楽について、自分以外のメンバーが語ることを決して認めなかったからだ。しかし今回は、取材に答える条件として、彼みずからがライアンとヘイミッシュの同席を希望してきた。事実として、クレイグは、スムースな会話を交わすには、まだ難しい状態にある。双方向の会話を長時間成立させることは、今の彼にとって決して楽な作業ではないのだ。音楽についてであれば驚くほど熱心に、時には呆れるほど自分のアイデアを喋り倒していた以前と比べれば、極端なほど口数は減り、言葉もたどたどしくなった。しかし、ライアンとヘイミッシュが、それを両脇でしっかり見守っている。インタヴューの途中、答えに窮したクレイグが、彼らに助け船を求める場面すらあった。それはきっと、バンドとしても彼らが、この『ヴィジョン・ヴァリィ』を経て大きく変化していることも示しているだろう。そう、とてもゆるやかな時間をかけて、ようやく彼らは自分達の冒険録に新しい1ページを書き加えた。そして、ザ・ヴァインズの進む未来には、まだたくさんの可能性が満ちている。

●ホント、今日は何より、またあなた達三人と会うことが出来て嬉しいです。

ヘイミッシュ・ロッサー(以下、ヘイミッシュ)「(笑)エクセレント!」

●それから、こうして話をする機会をくれてありがとう。

ヘイミッシュ「俺達の好きな雑誌だけにね(笑)」

●ありがとう。じゃあ、何から始めようか? まずは私の、アルバムの感想から言った方がいいよね。

クレイグ・ニコルス(以下、クレイグ)「オッケー」

●私は、この『ヴィジョン・ヴァリィ』はこれまでの作品の中で一番美しくて、一番悲しいアルバムだと思った。

クレイグ「うん……。そうだな、同意しなきゃいけないかな。絶対に悲しみはあるからね。うん(笑)」

ヘイミッシュ「君がこれをベストだと思ったことは嬉しいよ。俺も俺達のベストのアルバムだと思う。すごく力強いっていうか、弱い曲がない」

ライアン・グリフィス(以下、ライアン)「僕は、どれも内側はハッピーだと思うんだけど」

ヘイミッシュ「でも、最初の2枚にもメランコリーはあるだろ? ちょっと。そう言えるよな? 全部サンシャインばっかりじゃない(笑)」

クレイグ「アハハ」

●そう、『ハイリー・イヴォルヴド』や『ウィニング・デイズ』にもダークでメランコリーな感情はあった。でも、その多くは苛立ちや怒り、フラストレーションだったと思うんだ。でも、このアルバムはもっと、その先にある痛みや悲しみなんじゃないか、って。

クレイグ「うん。まあ、僕は悲しかったんだと思う。そうだね……どう答えていいのかわかんないけど(笑)」

●じゃあ、ゆっくり訊いてくね。実際にクレイグが、新しいアルバムのために曲を書き始めたのは、いつ頃だった?

クレイグ「2004年。たぶん2004年の後半に入った頃から、2005年の初めに――」

ヘイミッシュ「(携帯の着信音が鳴る)あ、ごめん」

ライアン「(笑)あーあ、なんだよ」

クレイグ「アハハハハ」

ヘイミッシュ「俺の携帯が鳴ると、いつもこうなんだ(笑)。ごめん、続けて」

クレイグ「……集中力失っちゃった。うん……曲を書いたのは2004年から2005年にかけて」

●ゆっくりと曲を書き溜めていった?

クレイグ「いや、そうじゃないと思う。かなり早く出来たから。多くの曲が、同じ頃に形になったんだ。だから……うん、かなり早かったんじゃないかな」

ヘイミッシュ「俺達にしても、いきなり新曲をたくさん聞かされて、『うわ、いい曲だな!』って感じだったしね。クレイグが長い間隠してたんなら別だけど(笑)」

クレイグ「ううん、違うよ」

●その間、二人は?

ヘイミッシュ「2004年の年末にかけて、俺らのどっちかがちょくちょくクレイグの家に行って、曲のデモを作ったりしてて。その頃6、7曲やったのかな?」

クレイグ「うん」

ライアン「その間、僕らはたぶん、単純に休みを取ってたんだと思う。最後にプレイした時からね。まあ、待ってたって言えるんだろうな。でも、それって曲が出来てくるのを待つっていうよりも、また準備が出来るのを待ってたっていう感じだったんだ。またフォーカスするようになるのを待つ、っていうか」

●一番最初に形になった曲って、どれだか覚えてる?

クレイグ「えーっと……」
ヘイミッシュ「“テイク・ミー・バック”かな?」
クレイグ「うん。“テイク・ミー・バック”が最初だった。僕ら、この曲のデモを作って、いいのが出来たと思って。あれは……その時、8トラックだったんだけど。うん、あれだと思う」
ヘイミッシュ「“ナッシンズ・カミン”もほとんど初めだったよな。デモを作り出した頃」
ライアン「“ドープ・トレイン”も」
クレイグ「うん。“ドープ・トレイン”と“ナッシンズ・カミン”もそうだね」
●“テイク・ミー・バック”に私が想像するのは、世界中の都市をツアーでまわり続けて疲弊してしまったあなたが、自分の居場所、故郷に戻りたいって感じていたことを、とてもシンプルに反映した曲なんじゃないかってことなんだけど――。
クレイグ「うん、たぶん……それっていい説明だと思う。たぶんね。自分じゃ何を書いたのかよくわからないんだけど……うん、そのことかもしれないな」
●どんなことを書こうとしたのか、まだ自分の中で対象化出来てない曲は、まだたくさんある?
クレイグ「そうだね、そう思う。かなり抽象的な歌詞がたくさんあるから。……うん。僕、時々、自分でも何を言ってるかよくわからないんだ(笑)。でも、曲のアイデアって100%あることについじゃなくてもいいから。もっと一般的なアイデアっていうかさ」
●そうだね。でも実際、このアルバムを聴いて多くのファンが想像するのは、『ウィニング・デイズ』の後、この2年間にあなた達が体験した幾つかの事件、出来事、それによってあなた達がすごく苦しんだんじゃないか、っていうことだと思う。そのことについてはどう思う?楽曲のために誇張したストーリーやエモーションを、あなたのパーソナルな出来事と直接的に結び付けられることに違和感を感じる?
クレイグ「ううん、そうは思わない。みんながどう曲を受け止めても、僕は構わないし。だって……それってコントロール出来ないから。僕はパーソナルな体験から曲を書いてるけど、いくつかの曲はただ作り上げたストーリーだし。それに、抽象的なものも多いしね。だからたぶん、それは大丈夫だと思う」
●二人はどう感じた? 正直、とらえ方によっては、あまりに直接的過ぎるように感じる曲もあったはずだと思うんだ。
ヘイミッシュ「勿論、かなりパーソナルな曲だとは思った。たぶん、俺が最初に聴いたのはさっきの2曲、“テイク・ミー・バック”と“ナッシンズ・カミン”だったんだけど――うん、ちょっと悲しみがあるよね。“ナッシンズ・カミン”には、苦しみさえあると思ったし。まあ、俺が感じたのはそれかな」
ライアン「上手くは言えないんだけど、抽象的な曲の方がより意味が通じるってこともあるんじゃないかな。クレイグにもわからないような曲の方がね(笑)。より無意識下で書いてるから。聴きながら考えてみると、だんだん意味がわかってくる、みたいなさ。で、同時に、すごくパーソナルなものにも感じられるっていう」
●以前、クレイグは「自分はある種の困難に直面した時、それをソングライティングで寓話化することで乗り切るんだ」って話をしてくれたことがあったけど、それは、今作にも当てはまったと思う?
クレイグ「うん、そう思う。今でもそういう想像みたいなところが曲にあるから。……夢みたいなサウンドとか、そういうの」
●実際に何か困難に直面した時に曲を書いた、っていう体験も実際にあった?
クレイグ「そうだね。うん。それをいい方法で吐き出せるっていうか。自分を表現するいい方法だと思うから。曲を通じて……歌詞とかサウンド、メロディなんかで」
●今回のアルバムの曲の多く――例えば、“ドント・リッスン・トゥ・ザ・レディオ”や“ナッシンズ・カミン”、“テイク・ミー・バック”といった曲を筆頭に、アルバム全体にどこか、何かから拒絶されてしまったような感覚、裏切られてしまったような感覚がとても強い気がした。もしそれが本当だとしたら、自分は何に拒否され、何に傷付けられ、追い込まれたのだと思う?
クレイグ「いや……どうなんだろう? ただ僕は、すごく……自分は一人きりだ、って感じてたんだと思う。だから……混乱だよね。それじゃないかな」
●例えば、ある瞬間から態度を豹変させたメディアや、

“フューチャーターデッド”は未来と同時に、過去についての曲でもあると思う。あの曲のサウンドって、僕にはすごく古い感じに聞こえるし。あとは、携帯電話とかコンピュータとか、テクノロジーによって、人々が孤立していったこととか。僕がちょっと、そういうものに混乱してるだけなのかもしれないけど。でも、最初は何もかもがすごく自然だったはずなのに、今じゃ自然はなくなってきてしまったな、って

あるいは、バンドから離れていったファンに対する思いってあると思う?

クレイグ「ううん、それは違うと思う」

ヘイミッシュ「“裏切られた”って言葉はかなりキツいんじゃないかな。っていうのも……勿論、2002年にはメディアは俺達に対してすごく好意的で、たくさんの記事を書いてくれた。で、実際、そこに背を向けられたっていうのはある。特にイギリスのメディアではね。でも、それってそういうものなんだよ。大袈裟に書き立てて、タブロイド紙なんかだと、それが大々的な“ストーリー”になったりする。どんなことでも、彼らはエキサイティングな代物にしなきゃならないから」

クレイグ「(ヘイミッシュのサングラスをかける)」

ヘイミッシュ「……いいじゃん(笑)」

クレイグ「ふふ」

●じゃあ、このアルバムにある怒りや悲しみは、外界に対してのものではなくて、あくまでの自分自身に向けられたものだと思う?

クレイグ「うん、そうだと思う……そうだね(笑)。ううん、たぶん……むしろ、自分の置かれた状況に対してっていうかさ」

●それを、もう少し説明することは出来る?

クレイグ「えーっと……たぶん、僕は孤立してたんだよね。でも、それって……誰かが僕をその状況に置いたってことでもないんだろうな。うん。僕が自分でその状況に追い込んだんだと思う。まあ、大丈夫だったんだけど(笑)」

●でも、それって一番苦しいことでもあると思うんだ。誰のことも責めずに、自分自身を追い込むのって。

クレイグ「うん……僕は、僕を責めてる」

●訊きにくい話なんだけど、たぶん、日本のファンはみんな知りたいと思ってることだと思うから訊くね。2年前、日本でのツアーの時のこと、覚えてる?

ライアン「うん」

ヘイミッシュ「覚えてるよ」

●たぶん、あの時期っていうのはクレイグも、バンドも、それにファンも一番、混乱してしまった時期だったと思うんだ。

クレイグ「うん……。僕、彼らに謝りたい」

●いいえ、謝る必要はない。

クレイグ「……わかった。オッケー」

ヘイミッシュ「(笑)」

クレイグ「……本当言うと、僕、あまり覚えていないんだ。すごくストレスのあった時期だった、ってことはわかってるんだけど。でも、それだけで」

●うん。勿論、あの時、傷付いたファンは少なからずいたと思う。でも、傷付いたとしても、それでも、みんなはあなた達のことを待ってたんだよ。で、あなた達はこうして新しいアルバムを完成させて、戻ってきた。それが一番大切なことだと思う。

クレイグ「うん……。うん」

ヘイミッシュ「埋め合わせしたかな?」

●そう、どんなことよりもベストな形で。

クレイグ「……ありがとう(笑)」

●じゃあ、あなた達がヴァインズというバンドを結成した時、あるいは音楽をやろうと決めた時から、こうして3枚のアルバムを経過したことで、自分達はどんな夢を成し遂げたんだと思う? かつて目指したものを、達成出来たと思う?

クレイグ「うん、そう思う。僕らはただ、いいアルバムを作りたかったし……3枚ともいいアルバムだと思うから(笑)。だから、やりたかったことは達成出来たと思う。僕らは、音楽をプレイしたかったから」

●まだ達成されていないことは、何かあると思う?

クレイグ「えーっと……何だろう?」

ヘイミッシュ「〈フジ・ロック〉でプレイしてないな」

クレイグ「そうだね(笑)。それはまだやれてない。でも……ううん、僕が考えてたよりも、僕らはもっと多くのことを成し遂げてると思う。で、僕らはただ、これを続けていきたい、っていうか」

ヘイミッシュ「俺はバンドをやっててずっとツアーをしたかったし、アルバムをレコーディングしたかった。ヴァインズではそれが全部一度に起きたんだよ。このバンドに加わって、すぐにツアーに出て、アルバムを作って。だから、俺の持ってた野望はほとんど達成されたっていうか。バンドに加入すると同時にね。だから、今となっては、もっと大きなゴールを設定しなきゃいけないのかもな。例えば、スタジアムでやるとか、バックステージでどんちゃん騒ぎをやるとか」

クレイグ「アハハ」

●諦めなければいけなかった何かは、あると思う?

クレイグ「どうだろう。……ないと思う」

ライアン「僕もない気がするな」

●例えば2曲目の“ナッシンズ・カミン”。この曲で歌われている、「何も変わりはしないんだ」っていう言葉は、どんなことに対する諦めなんだろう?

クレイグ「うん……わかんないな。たぶん、あれを書いた時、僕はネガティヴな気持ちだったんだと思う。『もうこのままなんじゃないか?』って思ったり、自分がこれから何をするのかもわからなかったり。これ、僕が最初に書いた曲なんだよね。だから僕は、なんていうか……ただ、えっと……(ヘイミッシュに)助けてよ」

ヘイミッシュ「(クレイグに)“ナッシンズ・カミン”か? あの曲はどっから出てきたんだ?」

クレイグ「うん、そこなんだけど、なんていうか……“どこでもない場所”なんだよね。あの曲は、そういうことについてなんだ。ただ……僕は悲しんでた。上手く言えないんだけど、希望もなくて、未来もなくて。ノー・フューチャーで(笑)」

ヘイミッシュ「先も見えないっていう?」

クレイグ「うん、そう。何もない。だから“ナッシンズ”なんだ」

ライアン「ただ、そういう瞬間だよね」

クレイグ「うん」

●じゃあ、“未来”繋がりの質問。“フューチャーターディッド”の、進歩のない未来、発展の止まってしまった未来、というアイデアはどんなところから生まれたんだろう?

クレイグ「あの曲は、ただ、テクノロジーについてなんだ。あの曲って未来と同時に、過去についての曲でもあるんじゃないかな。それに……僕にとっては、すごく古い感じに聞こえる。サウンドがね。何ていうか、未来的には聞こえないっていうか」

ヘイミッシュ「ちょっとトライバルな感じなんじゃないかな」

クレイグ「うん、トライバルだね」

ヘイミッシュ「俺達はトライブ(部族)なんだけど、エレキ・ギターを持ってるんだ。ははは!」

クレイグ「ふふっ! 彼って面白いよね(と、ずっとくすくす笑い続ける)。ねえ、ヘイミッシュって本当に面白いんだよ。僕らのこと、エレキ・ギターを持ってるトライブだなんて」

ヘイミッシュ「何世紀の部族だろうな(笑)。プラグはないといけないわけだから」

クレイグ「くっくっく(笑いが止まらない)」

●未来のことでもあるし、過去のことでもあるし。つまり、少なくとも今ではない、っていう感覚?

クレイグ「うん、現在じゃない。あー……でも、ちょっとは今のこともあるかもしれないな。最初のライン(『僕はどうやって未来が始まったのかわからない』)とか。うん。あとは……曲のタイトルが多くを物語ってると思うんだ。“フューチャーターディッド”って、人々のことについてでもあるし。『人類が始まった時は、どんな感じだったんだろう』とか。僕らがまだ部族だった頃はね(笑)。あとは……テクノロジーが増えていくにつれて、人が孤立していったこととか。生き延びるために。そういうことがメインだと思う」

●より原初的な生き方とか、そういう意味? もっと本能的であるべきだ、みたいな。

クレイグ「うん、そう思う。もっと……集団としてまとまってるべきなんじゃないか、とか。その方がいい気がする。まあ、単に僕のアイデアなんだけど(笑)。だって……そうはならないと思うから。今よりもっと外に出ないでよくなるだろうし。電化製品とか機械なんかが代わりにやってくれるんだよね」

●例えば、ネットを介してコミュニケーションを取っているようでも、それって本質的にはより人を孤立させてるようなことと同じ?

クレイグ「そうそう。でも、あんまり深くは考えなかったな。ただのアイデア。例えば携帯電話とか、コンピュ

ータとか……そういう感じ。別にそういうのを非難してるわけじゃないんだ。僕がちょっと、そういうものに対して混乱してるだけなのかもしれないし。だから、自分が感じたことを言ってるだけ、っていうか。最初は何もかもがすごく自然だったはずなのに、今じゃ自然はなくなってきてしまってるな、って」

ライアン「うん」

クレイグ「もし電気とか燃料が切れちゃったら、誰が生き延びられるんだろう、とか。だって、僕は植物の育て方も知らないし、食料の作り方も知らないし。そういうことって、昔はみんな知ってて、一緒に生活してたんだよね。でも今はそうじゃなくなってるから。きっと、うろたえちゃうんだろうな」

●振り返ってみると、『ハイリー・イヴォルヴド』は「自分はとにかくここから、今いる場所から出て行くんだ」って宣言してるようなアルバムだったと思う。で、『ウィニング・デイズ』は、その新しい外界の世界への憧れと憎悪、自分が離れてしまった故郷への愛情と悲しみとに、まるで引き裂かれたようなアルバムで。つまり、あなたの曲っていうのは、ずっと自分のいるべきところ、ホームを探し続けることがテーマになってたとも言えると思うんだ。その感覚、テーマはこの『ヴィジョン・ヴァリィ』でも続いていると思う?

クレイグ「あー……すごくいい質問だな。でも、どう答えられるかな。たぶん……ホームはないんだ」

●そう思う?

クレイグ「(ヘイミッシュに) ねえ、助けて」

ヘイミッシュ「(笑) まあ……結局のところ、『自分はここにいる方がいいんだ』ってことなのかな」

クレイグ「うん、そう。そうだよね。ホームはあるんだ。……うん、あるんだよ! だってきっと、故郷に勝る場所はないんだから (笑)」

●じゃあ、アルバムの最後の曲、"スペースシップ"の歌詞はどうだろう? あの曲は、自分の住み慣れた家、家族から離れていく、別れの言葉にも捉えられるよね?

クレイグ「うん。僕は宇宙船に乗ってホームから離れるんだ、って。でも、それはただ、さっき言ったみたいなフェアリーテイルなんだよ。ある意味。もしかすると、リアルな意味では、『自分はホームから離れようとしてる』ってことなのかもしれない。それって、悲しいことかもしれないね。実際、この曲は悲しく聞こえるし……たぶん、そうなんだろうな。でも、ただのストーリーなんだよ、きっと。僕自身がそんな風に感じていたにせよ、それをもっと曲のために誇張してるし」

●うん。そのストーリーの中で、主人公が乗り込んだ後、宇宙船はどこに向かうんだろう?

ヘイミッシュ「まあ、宇宙だろうな (笑)」

クレイグ「あはは。えっと、そうだな……ブリスタニア。"さらなる至福 (ブリス)"のある場所。『シンプソンズ』に出てくるんだ。ブリスタニアに向かう宇宙船に乗れる、って説くカルト宗教があって――いや、これってひどいジョークだな (笑)。ゴメン、今のはなし。えっと、宇宙船は……あー、僕、そこまで考えなかったな。ただ自分を連れていってくれるっていう、それだけで。他の星なのかもしれないね。うん。たぶん、ヘイミッシュが言った通り、基本的には宇宙なんだと思うんだけど。ブリスタニアじゃなくて (笑)。あれはTV番組のでっち上げだから」

●"スペースシップ"の前、"アトモス"も宇宙を想像させる曲だよね。地球ではない場所に、自分の意識が向かっていくっていうか。

クレイグ「うん、偶然なのかどうかはわからないけど。でも、これも絶対にスペイシーな曲だよね。僕もそんな気がする」

ヘイミッシュ「エスケーピズムってことかな?」

クレイグ「うんうん、そう! 逃避主義。少しでもここから遠いところへって。この曲も宇宙を飛ぶような感じだし」

●ヴァインズの音楽には、つまり、常にエスケーピズムは大切な要素としてある、と言えると思う? これまでも、このアルバムでも。

クレイグ「うん、だと思う。このアルバムだと、最後の2曲でよりわかりやすい形になってるけど、でも、アルバム全体にそれってあるんじゃないかと思う」

●あと、"アトモス"ってラヴ・ソングでもあるよね?

クレイグ「うん、そう思う」

●これまで、クレイグはラヴ・ソングを書くことに、あんまり興味がなかったよね。

クレイグ「うん……でも、もしかしたらいくつかはあるかもしれない。"メリー・ジェーン"はそうだと思うし」

●うん、そうだね。

クレイグ「うん……でも、"アトモス"はかなりストレートなラヴ・ソングなんじゃないかな」

●愛情の告白と同時に、何かを謝ってて、許して欲しいって願ってるようにも感じられる曲だよね。

クレイグ「うん、そう。それって……すごくいい解釈なんじゃないかな。まさに、その通りだと思う」

●自分が彼女を傷付けたんじゃないか、っていう思い?

クレイグ「……わかんない。それは、わからないや」

●この曲だけに限らず、かつて自分が誰かを傷付けてしまったんじゃないか、と思い起こすようなことってあったと思う?

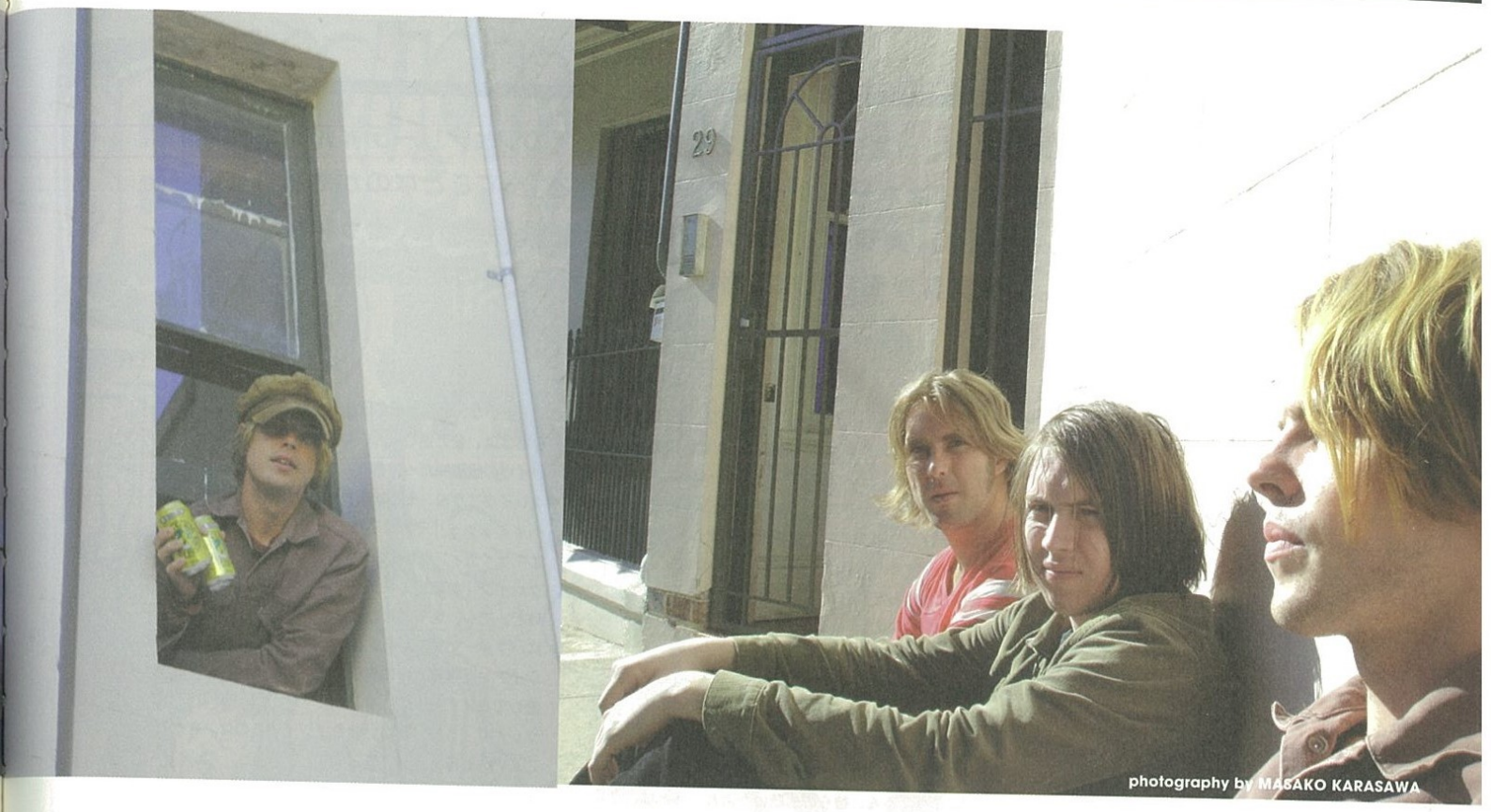
クレイグ「どうだろう……。でも、音楽を作ることは、誰かを傷付けたりはしないと思う。だって、音楽っていうのは、人をハッピーにさせたいってことだから。僕は誰のことも傷付けたくないし。自分の気持ちを吐き出してる、っていうだけで」

●音楽は、絶対に人を傷付けたりしない?

クレイグ「そうだな……うん、傷付く人がいるのもわかってるんだけど……ノー。いや、イエス (笑)」

ライアン「勿論、音楽が人の心を悲しませることはあるけどね。ハッピーな曲もあれば、悲しい曲もあるから」

クレイグ「でも、誰も傷付かないんだよ。誰も。……僕は誰にも傷付かないで欲しい。本当に。誰かを傷付けるつもりはないから。ただ、これは音楽なんだ、っていう



photography by MASAKO KARASAWA

だけで」

●じゃあ、このアルバムの中で一番、希望に満ちてるのはどの曲になるだろう?

クレイグ「“キャンディ・デイズ”かな」

ライアン「うん、絶対にそうだね」

●すごく不思議な曲だよね。とても抽象的で。

クレイグ「うん、ハッピーな曲のつもりなんだ」

●キャンディ・デイズって何なんだろう? 私が想像したのは暖かい場所とか、日なたとか、もっと漠然としたポジティヴな何か、って感じだったんだけど。

クレイグ「うん、ただ僕の頭の中にあった言葉なんだけど(笑)。ギターを弾いてたら、とても自然に出てきたんだ。で、僕にはそれがとてもシンプルで、アップリフティングに思えて。だから、気に入って」

●このアルバムには13曲が収録されているけど、その中で、もっともフェアリーテイル的な曲はどれだと思う?

クレイグ「そうだな……“スペースシップ”じゃないかな。あと、“ヴィジョン・ヴァリィ”もそう」

●うん、あの曲の描く風景や物語は、とても幻想的だよね。どんなところからインスパイアされたんだろう?

クレイグ「えっと……ただ一人きりでいること、かな。午後、陽が沈もうとしてる時で。かなりシンプルなところから出来た曲だと思う」

●じゃあ、その一方で、もっとも自分自身を映し出している、自伝的な曲はどの曲だと言えると思う?

クレイグ「うーん……やっぱり、それも“ヴィジョン・ヴァリィ”かな。それか“エニィサウンド”。でも、このアルバム全部……ううん、半分は自伝的かもしれない。少なくとも半分」

●“ゴーイング・ゴーン”について少し教えてくれる? かつて、カート・コバーンは『イン・ユーテロ』で、女優のフランセス・ファーマーをモチーフにして曲を作ったりもしていたよね。それと同じように、この曲の主人公、アンナには誰かモデルになった人物がいる?

クレイグ「これはただ、僕が作ったキャラクター」

●そうか、でも、とても悲劇的なキャラクターだよね。

クレイグ「うん、確実にそう」

●この曲で歌われている、彼女が書き残していった「無駄なことなんて何ひとつなかった」という言葉は、どんなイメージから浮かんできたものなんだろう?

クレイグ「っていうより、僕が考えてたのは……わかんないけど、ほんと詩みたいなものなんだ。ベッドルームに言葉を書き残すっていうのは……ただ、悲劇的な感じっていうか。君が言ったみたいに。だから、そう書いた時、実際の言葉が何なのかってことは、僕、あんまり考えてなくて。たぶん……何かしら、象徴的なことなのかもしれないね。うん、そうなんだろうな。きっと何か、とても重要なことが書かれてるんだと思う」

●うん。

クレイグ「……それ以上は、わからないや」

●(笑)OK、それじゃあ少し軽めの質問にしよう。今回のレコーディング中に、一番楽しかった思い出を教えて下さい。

ライアン「ヘイミッシュ。全体的に(笑)」

クレイグ「あははは」

ヘイミッシュ「可笑しかったのはさ、クレイグがあるゲームを始めたんだよね。“ウラー”っていうんだけど(笑)。クレイグがドアとかカーテンの後ろに隠れて、誰かが来るのを待って『ウラーッ!』って飛びかかるんだよね。で、スタジオにはファイってアシスタントがいたんだけど、クレイグがカーテンの後ろに隠れて。で、俺達が『ファイ、ヘッドフォンが繋がらないんだ! こっちにきて様子を見てくれ』とか言って。勿論、そんなトラブルなんてないんだけど(笑)、クレイグがめちゃくちゃに驚かすんだ。子供っぽいんだけどね、でも笑ったな」

●はは。じゃあ、一番苦労したところは? もっとも努力が必要だったこと。

クレイグ「ヴォーカルをレコーディングしたいのに、僕が風邪をひいちゃった時かな。うん、あれは完璧にトラブルって感じだった」

ライアン「それ以外はかなりスムースだったんだよね。彼が風邪を引いた一週間以外は、かなり楽なセッションだった」

ヘイミッシュ「勿論、典型的なバンドでの口論っていうのはあったけど。(プロデューサーの)ウェインはずっと『ヴォーカルにリヴァーヴがかかり過ぎてる』って言ってるのに、クレイグは『これでいい! もっとリヴァーヴ!』って(笑)」

クレイグ「僕の、アルバムの全体的なイメージが、もっとリヴァーヴだったんだよね(笑)」

ヘイミッシュ「その感じ、わかるだろ? クレイグのフェイヴァリットは“ドント・リッスン・トゥ・ザ・レディオ”なんだけど、実際、すごくいい結果になったと思う。ウェインはすごくベーシックにやりたがるんだけど、それはヴァインズのスタイルじゃないからね。俺達はいろんな楽器も、リヴァーヴも入れたいから」

ライアン「まあ、リヴァーヴに関しては、そういう風にもめた100万個の課題のうちの一つなんだけどね」

クレイグ「あとは、ディレイとか(笑)」

●(笑)。

ヘイミッシュ「例えば、“スペースシップ”にはクレイジーなマンダリンが入ってて、まるでキーボードみたいに聞こえたりするだろ? あの曲は、他にもかなり変わったサウンドが入ってるんだ。あと、“ヴィジョン・ヴァリィ”と“ゴーイング・ゴーン”では、初めてストリングスを使ったりもしてるし」

●そうだね、フルで導入するのは初めてだよね。

クレイグ「うん。僕、それについては前から絶対にチャレンジしたいと思ってたんだ。あの曲にも、すごく合ってると思うし」

ヘイミッシュ「俺達はライヴだと、すごくシンプルなバンド・スタイルなわけだけど、でも、レコーディングじゃ、いわゆるガレージ・バンドっぽいアプローチはほとんどしてないんだよ。もっと洗練されてるっていうか。たくさんのヴォーカル、ハーモニーを入れて、楽器を入

「宇宙船に乗ってホームから離れるんだ」っていうのは、ある意味、ただのフェアリーテイルなんだよ。もしかすると、リアルな意味では、「自分はホームから離れようとしてる」ってことなのかもしれない。それって悲しいことなのかもしれないね。実際、この曲は悲しく聞こえるし。きっと、そうなんだろうな。でも、ただのストーリーなんだよ。僕自身がそんな風に感じてたとしても、曲のために誇張してるんだ

れて」
クレイグ「そう。ガレージを出て、もっとスタジオに入っていくんだよね（笑）」
●それぞれのプレイヤビリティの部分ではどう？　どんな部分を更新させたい、と考えていたんだろう。
ヘイミッシュ「デモを作り始めた時に、クレイグは『このアルバムは、よりヘヴィなものにしたい』って言ってたよな。実際、そうなったと思うし。ある意味、よりロックなアルバムっていうか。でも、俺は今回、ドラム・ソロをやりたかったのに、クレイグがやらせてくれなかったんだよな」
ライアン「（笑）まあ、ドラム・ソロについては、いつだってもめるんだけどさ」
クレイグ「アハハ」
ヘイミッシュ「いや、それって別に、自分のミュージシャンシップを押し出したいって話じゃなくてさ。実際、ジャズとかフュージョンみたいなのに近付くと――特にドラマーって、自分のエゴが剥き出しになりがちなんだよね。でも、そうじゃなくて、プロデューサーの意見を聞いて、あまりビートを刻まずにシンプルにいこう、って。大抵、その方がベストの結果になるんだよ。複雑にしようとせずに、もっと曲を良くすることをやろうって」
ライアン「それはギターについても同じだったよね。実際、かなりシンプルだから。メロディの周りを回ってるだけ、みたいなさ。だからギターに関しては……うん、ただソニックに聞こえるようにしたかった、ってことくらい。特に深く考えたりする感じでもなかったし、どういうサウンドにすればいいのかは、かなり明白だったからね。リハーサルの通りにやればいい、っていう」
●クレイグは？
クレイグ「僕は、いい曲にしたかっただけ。あとは、曲を短くして、よりシンプルなものにしよう、っていうのもあったかな。何ていうか、すぐにポイントをつかむ曲にしたかったんだ。別に長い曲にしたくないわけでも、短いものにしたいわけでもなくて、結果そうなったんだよね。それに大抵、僕は2分くらいの曲の方が好きだし。5分じゃなくて。その方が、僕らの曲はうまくいくから。ほとんどの場合は、かなりシンプルなアイデアがあって、それを伝えるのには長い時間はかからないんだ」
●その感覚は、もしかすると“ゲット・フリー”の頃に戻ってきたのかもしれないね。
クレイグ「うん、そう思う。僕らは、すごくシンプルな曲に戻ってきてる。2ndアルバムでは、いろんなアイデアにトライしたからね。勿論、このアルバムでもトライしてることはあるんだけど、結局は、『シンプルな方がいいじゃん』って（笑）」
●それは、前のアルバムから学んだこと？
クレイグ「というより、ただ僕らはより経験を積んだ、ってことなんじゃないかな」
ライアン「何であれ、プレッシャーがなかったんだよ、今回って。ほんと、カジュアルなアプローチっていうか」
クレイグ「うん、僕もそう感じた。ただ、前のアルバムの時にも、実はそんなにプレッシャーは感じてなくて。僕は（アルバムが作れて）よかったと思ったし、またレコーディング出来ることに興奮してたし。それに、僕、もともとアルバムを作る時って、そんなにプレッシャーを感じないんだ。やってることに集中するだけだから」
●じゃあ、このレコーディング中に、他のレコード聴いたりした？
クレイグ「えーと、どんなの聴いてたっけな。ホワイト・ストライプスとか、ストロークスとか。リチャード・アッシュクロフトの新しいのもよく聴いてたと思う」
ヘイミッシュ「フランツ・ファーディナンドは？」
クレイグ「うん、彼らのも聴いたよね。あとは、グレアム・コクソンとか」
●一番最近の？　『ラヴ・トラヴェルズ・アット・イリーガル・スピード』？
クレイグ「そうそう、それ」
ヘイミッシュ「そのアルバムはまだ聴いてないな」
クレイグ「すごいグレイトだよ。『ハピネス・イン・マガジンズ』も良かったけど、両方ともグレイトで比べられないくらい」
●そう言えば、アークティック・モンキーズが、「自分達はザ・ヴァインズのライヴを観て、すごく影響を受けたんだ」って話をしてるみたいだね。
クレイグ「うん。詳しくは知らないんだけど、何かいいことを言ってくれてるらしい、っていうのは聞いたんだ。ヴァインズが彼らに、少し影響を与えたらしいよ、って。勿論、まさか僕らがアークティック・モンキーズを作った、なんてことは思わないけど（笑）。でも、本当に少しでも影響を与えたのだとしたら、すごく光栄なことだよね。うん、いいことだと思う。実際、彼らはとてもグレイトなバンドだと思うから」
●もう、彼らのアルバム聴いた？
クレイグ「うん、すごくいいと思った」
ヘイミッシュ「素晴らしいアルバムだったよね。もしかしたら、俺達をサポートにしてくれるんじゃない？　ま、逆でもいいけど（笑）」
●勿論、サポートにしなきゃ（笑）。
ヘイミッシュ「いいポイントだ！　そう、彼らがザ・ヴァインズをサポートする（笑）」
●ライヴに対しては、ポジティヴに考えてるの？
ヘイミッシュ「いつかはやると思うよ。出来るなら、今年中にはやりたいけどね。でも、約束はしたくないんだ。みんなをがっかりさせたくはないから」
●まあね。クレイグもライヴ、本当にやりたい？
クレイグ「うん、勿論。楽しみにしてるんだ」
●2年間のブランクってやっぱり長いものね。
クレイグ「うん、恋しくなるよね（笑）。きっと前とは違うものになるはずだし。もっとコントロールされたものにしたいな、と思うんだけど」
●あはは、昔と逆じゃん。コントロール不能なところがライヴの醍醐味だって言ってたくせに。
クレイグ「うん、そこは変わってきてるんだ（笑）」
ヘイミッシュ「それはもう、過去のヴァインズ。でも、エキサイティングなものにはしたいだろ？」
クレイグ「勿論、エキサイティングなものではあるんだけど。でも、きっと曲数も増えるだろうし、もっと上手にパフォーマンス出来るようにしたいし」
ライアン「実際、今の僕らの演奏は、これまでになく上達してるはずだしね」
クレイグ「うん、新しい曲をプレイするのは、きっとすごくいいと思う」
●昔の曲で、今の自分達とはちょっと距離が出てきてしまったな、って思うような曲ってある？
ヘイミッシュ「たぶん（アウトキャストの）“ミス・ジャクソン”かな。あのカヴァー」
クレイグ「え？　あの曲、やりたくないの？」
ヘイミッシュ「ま、他のカヴァーをやればいいさ」
クレイグ「ふうん……そっか」
ヘイミッシュ「他にプレイしたくなるような曲はある？」
クレイグ「ううん、ないけど。だって、考えてみれば、僕らにはもう、かなりたくさんの曲があるわけだし」
ヘイミッシュ「いいセットリストが作れるよ。な？」
●うん、楽しみだよね（笑）。
クレイグ「（少し考えこむ）……でも、僕ら“ミス・ジャクソン”はやるよ」
ヘイミッシュ「（苦笑）」
クレイグ「やるんだってば！　絶対にヘイミッシュも納得するはずだよ。だって、“ミス・ジャクソン”は本当にグレイトな曲なんだから」
ヘイミッシュ「それはそうだけどさ、もう、あの曲は通過したと思うんだよなぁ」
クレイグ「じゃあ、“ミス・ジャクソン”もやって、ヘイミッシュのやりたい曲もやればいいじゃん。僕は他にどんな曲をカヴァーしたいか、とかは考えないけど。でも、“ミス・ジャクソン”はやる」
●あはははは。
クレイグ「絶対に、やるんだからね！」

以上が2時間に渡って交わした会話のすべてだ。そして、彼らの言う通り、今後、彼らがどんな風に活動をしてゆくのか、今はまだ明確なプランは発表されていない。ライヴにしても、まず新任のベーシストを探すところから始めなければならない。でも、もう何も焦ることはない。この作品を生み出したことで、彼らの時間は再び流れ始めた。そう、時間はまだたっぷりとあるのだから。彼らはゆっくりと、着実に歩いてゆけばいい。その先で、『ヴィジョン・ヴァリィ』はきっとまた新しい輝きを放つ作品として記憶されるはずだ。 S

編集部内“死合”連載

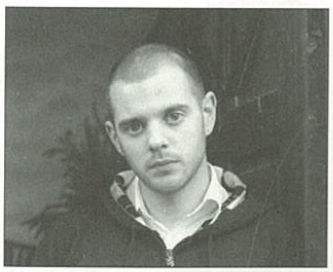
「俺のリアリティ」の巣窟

彼岸の北青山、その果てしなき闇と妄想

『スヌーザー』の行間からは、何故「まったり濃〜いもの」が滲み出ているのか？ 何故こんなにもトゥ・マッチ&アホなのか？ それは、その日常が余りにも密着に音楽と繋がり、余りに感情の振れ幅が激しい「俺リアル野郎」が集まっているからだ。これは、そんな“さくっと生きる”ことを知らない、彼らの徹底した「俺リアル」を切り取る、ゴミ連載である。今回のお題は、「ポップ・スターにたかるハイエナ野郎」でごんす

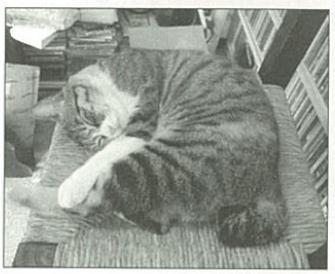
唐沢真佐子（以下、唐沢）「今回のニルヴァーナの記事まとめてて、びっくりしちゃいました。カート・コバーンが死んでから、もう12年なんですね」
田中宗一郎（以下、田中）「今、二十歳の連中は当時、8歳だったんだよな」
唐沢「去年の年末に『BANG ON!!』のリスナーから、『最近、髭ちゃんの須藤さんにそっくりなニルヴァーナっていうバンド見つけたんだけど、似てると思いませんか?』ってメールが来てたじゃないですか。てっきりタチの悪いネタかと思ったら、真剣でしたからね」
田中「俺もあれ読んで、初めて『そうか、じゃあ、ニルヴァーナの記事作ってみるか』って気になったんだよね」
唐沢「でも、それをガツーンと表紙にして、バリバリの守銭奴（①）になれないのが、うちのダメなとこですよね」
田中「まーな。じゃあさ、唐沢、カートが死んだ日って何してた?」
唐沢「えー。私、確か渋谷クアトロか、早稲田の学祭で、サルタンズ・オブ・ピンF.C.観てた記憶があります」
田中「またキツイの行ってるなあ」
唐沢「しかも、サポート・アクトが、なんと大川興行（②）だったんですよ」
田中「いいよ、そんなマメ情報」
唐沢「そのライヴ前に、どっかの喫茶店でMTVが流れてて、知ったのかな」
田中「俺、確か、その前日にロンドンでレディオヘッドの取材してててさ。で、当日は、プライマル・スクリームのライヴ観てたんだよ。レコード会社に連れられて、日本人ばっか30人くらいの集団で、大型バスに揺られて」
唐沢「景気いいっつうか、馬鹿ですね」
田中「で、ライヴに行く直前のホテルのロビーで、『自殺らしい』『デマだろ?』みたいな話になってさ。これからプライマルだってのに、ズドーンと重い空気になっちゃって。何故か、久保憲司は怒ってるし」
唐沢「確か、宗さん、『ロッキング・オン』の副編集長時代ですよね」
田中「そう。で、ロンドンから帰ってきて、そのまま土曜だか、日曜だかに出社してたんだよ。したら、読者から電話がかかってきて、『次号で、カート・コバーンの追悼記事は作るのか、表紙にしたりしないのか』って訊くわけよ。で、俺、馬鹿正直だから、『追悼記事を4ページとか、作るくらいだと思います』つったわけ。したら、当時、同じ編集部にいた宮嵜が、『絶対にクロスビートの回し者からの電話だ』って言い張るんだよ。『次にうちがニルヴァーナ特集やるかどうか、探りを入れてきたに違いない!』っていうわけさ」
唐沢「（笑）あー、宮嵜さんも若かったんだなあ」
田中「で、週明けの月曜に、追悼記事用のニルヴァーナの写真、通信社に借りに行ったらさ、当然のごとく、『クロスビート』の人達とかち合ってさ」
唐沢「ああ、ジョージ・ハリスン死んだ時も、『クロスビート』の編集長御一行とは通信社でかち合いましたねえ」
田中「『クロスビート』の人達って、誰が死んでも、朝一番にいるのかな」
唐沢「早起きなんでしょうね」
田中「で、もう写真の取りあいなわけ」
唐沢「まさにハイエナ（③）ですね」
田中「困った通信社の人達が、記事のページ数に合わせて、写真を貸し出すっていうルールを急遽、作ったわけさ。で、俺は『4ページなんで、2点貸して下さ〜い』なんつってたの。ところが、『クロスビート』の人達が帰った後に、当時の編集長の増井さんから、俺宛に電話がかかってきてさ。『ほほほー、急遽、表紙差し替えです。次号はカートのラスト・インタヴューを載せて、大特集を組むことにしましたので、がっつり写真借りてきて下さい』つって」
唐沢「じゃあ、カートの表紙の『ロッキング・オン』が出た時、『クロスビート』の人達、びっくりじゃないですか」
田中「騙されたと思っただろうな」
唐沢「今の話、聴く限りじゃ、絶対に宗さんが騙したと思いますよね」
田中「もし宮嵜が言うように、週末の電話もそうだったら、最高だけどな」
唐沢「じゃあ、今号に載ってるのが、その時のインタヴューなんですか?」
田中「いや、それがまた、もうひとつオチがあってさ。『ロッキング・オン』が載せたのは、実はカートのラスト・インタヴューじゃなかったんだよね」
唐沢「読者も騙したんだ?」
田中「単に、誰もあんまりよく知らなかったっていうさ。で、『クロスビート』の人、誌面で大批判! みたいな」
唐沢「ひどいオチ（苦笑）。でも、この号のも、記者が『最後のメジャー・インタヴュー』って書いてましたよね。厳密に言うと、違うってことですよね」
田中「誰か、『最後じゃない!!』って怒ったりしてくれないかな」
唐沢「でも、改めて読むと、ニルヴァーナの記事があまりにエグくて。ちょっと落ち込んじゃいましたよ。そうじゃなくても、ヴァインズのことで落ち込んでるっていうのに。多分、今のクレイグと会ったら、驚くと思いますよ」
田中「太り過ぎてて?」
唐沢「じゃなくて! あそこまで喋れなくなってるとは思ってなかったんで、正直、辛かったって話ですよ。取材の最初の30分間とか、うろたえてたと思いますもん、自分で。だから、今号のインタヴュー、実際は、クレイグの喋りがゆっくりだし、質問までの間も空くから、かなりの長丁場なんですよ。途中で休憩、2回も挟んでるし」
田中「トイレ近いんだな」
唐沢「すいませんね」
田中「お前かよ。そういや、あれ、流行らなかったよな、語尾の最後に『〜でヴァインズ』ってつけるやつ」
唐沢「でも、あれって、『そうでヴァインズ』とか、『困ったでヴァインズ』とか、『〜でやんす』が語源なわけですよね。でも、今、誰も、『まいったでやんす』とか、言いませんからね」
田中「そりゃあ残念でヴァインズ」
唐沢「仕方がないでヴァインズ」
田中「僕、クレイグ、猪八戒（④）に似てるでヴァインズ」
唐沢「しつこいでヴァインズ」 S

今月のリアル・アイテム



①守銭奴
鬼ほど稼いでも敵を作らず嫌われず、なんてウルトラCを決められるのは、この人だけでしょう。私生活暴いて、更に金儲け。一人して、リアリティTVを軽く蹴飛ばすスキルとユーモアには完敗です。逆に、稼げば稼ぐほど嫌われる人間の代表格は、ロビー・ウィリアムスとか?

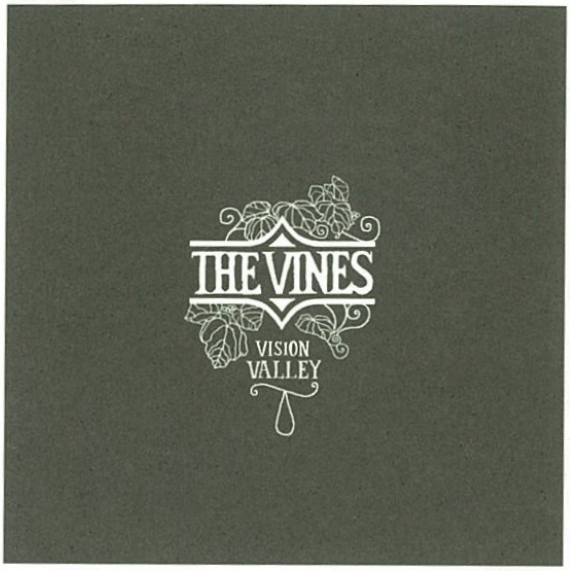
②大川興行
ハイッ、こちらはですね、大川興行ではなく、フランツのアレックスが披露してくれました、宮尾すすむの物真似でございます。ハイッ、でも、どうなんでしょうか、このポーズ。自分の色男っぷりにほぼ自覚症状ナシなところが、エレノアちゃんを射止めた秘訣なのかしらん。



③ハイエナ
あー、はいはい。もう説明するのも何なんですけど、本誌編集部の小悪魔マスコット、ダラスでございます。最近、ちょっと腰回りが大きくなり、グラマラスな女に近付いてまいりました。わかる言葉は、「ごはん」、「カニカマ」、「おやつ」です。今日も煩悩に忠実に生きてます。

④猪八戒
ゴダイゴの“モンキーマジック”も華々しくヒットした、日テレ『西遊記』では西田敏行が。今年に入ってのフジテレビ版では、元チビ・ノリダーこと伊藤淳史が務めました、名脇役＝猪八戒。もし海外版を作るなら、間違いなく、この人でしょう。ってムゴいこと言うなー!

RECORDING reviews

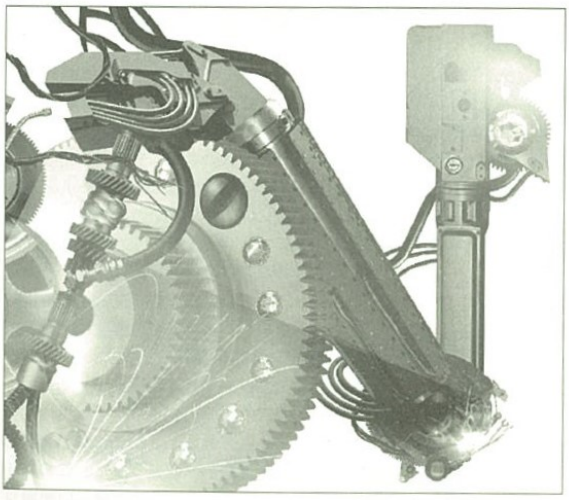


ザ・ヴァインズ
『ヴィジョン・ヴァリィ』
TOCP-66536（東芝EMI）
発売中

今もってザ・ヴァインズの初来日でのあのクレイグの荒くれっぷりは目に焼きついて離れず、翌日の取材でなぜか私にまで謝ってくれたパトリックとヘイミッシュの悲しげな表情も忘れられず、いやでも病気だったからしょうがないんだけど、でも表現というものにおいて「言い訳」というものがありえないからこそ、この新作を聴くのは怖かった。クレイグ自身が「だってオレ、病気だし」のように開き直った作品を作っていた場合のことを、おそらく誰もが恐れていたはずだ。しかしなんてことだ、このアルバムは聴き進むにつれてホロホロと自然に泣けてくる。なにしろクレイグがあくまでクレイグであること、変わらず懸命に世界と対峙しようとしていること、そのあれこれが率直に歌詞に散りばめられているのだから。一方で、ニルヴァーナ風のリフ一発勝負にクレイグの絶叫が乗るタイプの曲もあれば、繊細にポップさを層と成してゆくタイプの曲もありと、曲調はどこまでもヴァインズ印。むしろ休養後だからと肩に力を入れることを拒むかのように、サウンドにサイケ色が増したことを除けば、どこまでもこれまでどおりにヴァインズだ。クレイグがむやみに「変化」を志向したわけではないからこそ、そこに彼の誠実さが宿り、彼ならではの「直観」の働いた音楽を再び味わう喜びだけが、静かに押し寄せてくる。（妹沢奈美）

「僕はねじれて、擦り切れながら、なんとか光を見つけようとしてる葡萄の蔦（ヴァイン）」――本作はそんな赤裸々な告白から始まる。ヴァインズ飛翔以前、ヘッドフォンから流れ出す音楽の中にしか居場所がなかった少年は、そんな孤独な部屋から世界に飛び出すことを夢見て、『ハイリー・イヴォルヴド』を作り、「ここから出してくれ」と渾身の力で歌った。そして、飛び出した先の吐き気をもよおすような世界への嫌悪と、自然に囲まれた孤独な部屋への望郷の念の間で引き裂かれた『ウィニング・デイズ』は、彼自身の失望を予告した作品だった。その後、文字通り、世界から拒まれ、彼は再び一人の世界に戻ってきた。このアルバムは、絶望と自責の念が渦巻いた、真っ暗なひとりぼっちの部屋だ。

“ドント・リスン・トゥ・ザ・レディオ”は、もう一度だけ世界と抱き合いたいという希望と、また手痛い失態をやらかしてしまうに違いないという恐怖の狭間で怯えながら、外界の誘惑から耳を塞ぎ、希望を握りつぶすことでしか正気を保てない少年についての歌だ。だが、このタイトルのせいで、頭の悪すぎるラジオ局は、この曲をほとんどオンエアしない。お前ら全員、地獄に堕ちろ。お前らに音楽を伝える資格はない。どこにも帰る場所がない僕らの代わりに、今もクレイグ・ニコルスは一人で歌っている。（田中宗一郎）

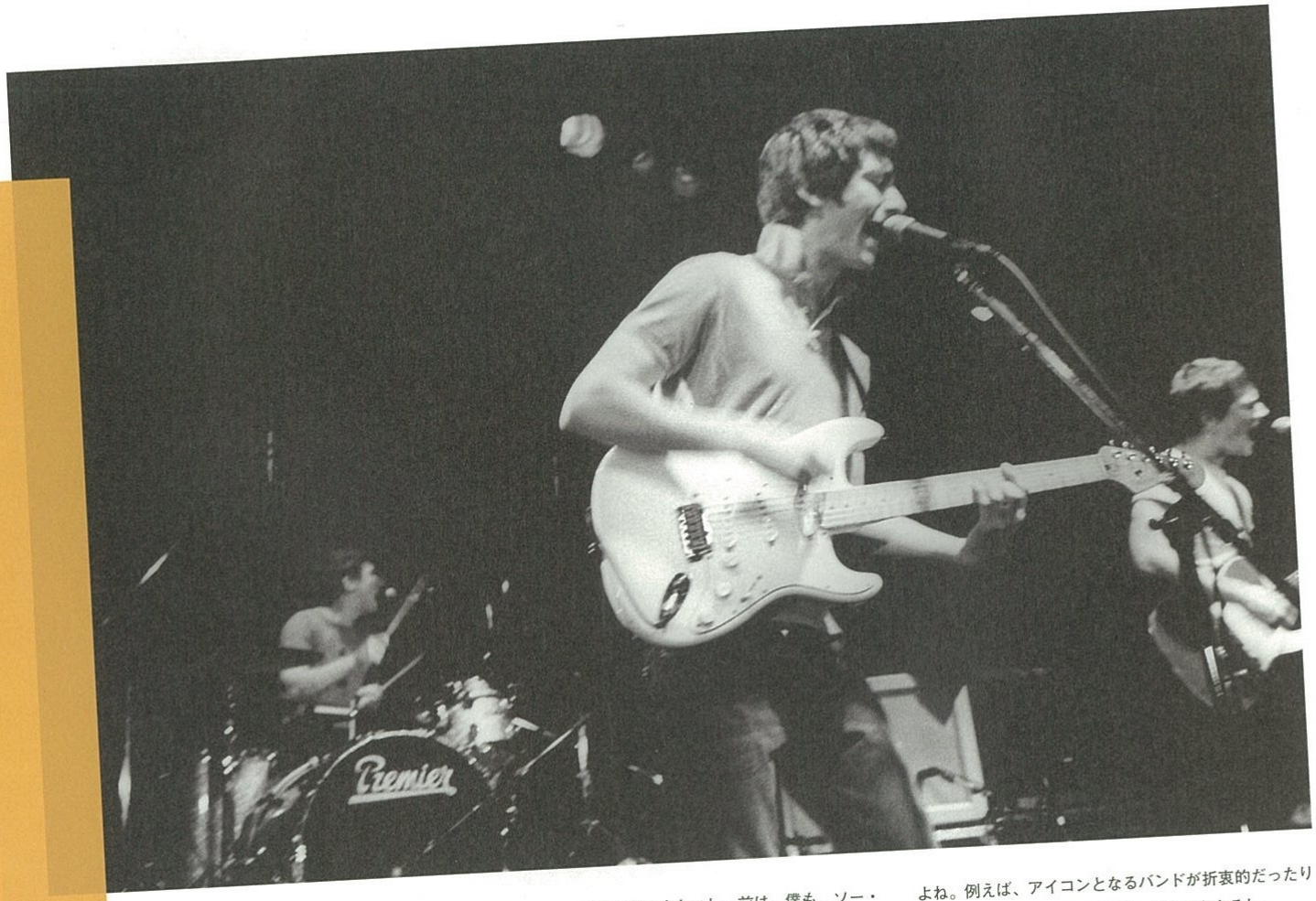


ブンブンサテライツ
『ON』
SRCP-401（ソニー）
5月17日発売

いいんじゃない？　いいじゃない！　生真面目な性格の完全主義者が、ある種の強迫観念まで背負いながらデスクトップ上で音楽芸術に向き合い、自らのサウンドを息苦しいほどにまでブ厚く塗り込めたものに作り込んでいくパターンの袋小路を、ブンブン・サテライツは思い切って飛び越えた。音数は減らしながら、その一個一個はパワフルに保ち、空間を生かしたプロダクションへと大転換が断行されたことは、1曲目〜2曲目を聴き終えた時点で誰しもが実感出来るだろう。もちろん、いきなり芯から軽薄ダンスものに豹変出来るはずはなく、この変化もまた気持ちが先に立った衝動的行動というよりは、相変わらず真面目に頭で考えたところから出発しているんだけれども、そうであるからこそリスナーも、このニュー・モードにすぐさま心を寄せることが出来るんじゃないかな。

ぐじぐじしててもしょうがねえから、とにかくムリヤリでも、フリだけでも、バーンとはじけてみよう。そうしてるうちに何だか本当に元気になってきちゃった――そんな経緯を辿れるのだとしたら、すごく良いことだと思う。とりあえず、本作の曲をライヴで聴けるのが楽しみだし、そこからのフィードバックが今後の彼らにとってさらに収穫となるんじゃないかという期待は大きい。このまんまガンガンいってください。（山谷浩也）

すっげー！　その錚々たるキャリアに寄せられる期待に十分に応えながら、かつ、その期待を見事に裏切る、というある意味、この上なく理想的な仕上がり。『ON』というシンプルなタイトルが示す通り、この通算5枚目の新作は、無邪気さと無謀さとが同居した、素晴らしい勢いに満ちている。例えば、ライヴを別として、これまでの彼らの音源作品はそのいずれもが、あまりにクソ真面目というか、重過ぎというか、そんなに考え過ぎると健康に良くないんじゃねえかな、という苦手意識を少なからず刺激した。一つの音に込められた信念はあまりに強固で、しかもそれが凄まじい重層となって押し寄せてくるのだ。その情報量は、まるで百科事典をドスンと目の前に置かれたようなもので、聴く身としても相当の覇気と根性が必要だった。しかし、この新作の驚くほどの躍動感はどうだろう！　勢いまかせに加速してゆく解放的なサウンドの数々、瞬間の狭間に生まれるグルーヴという名の揺らぎ、時に妖しいいかがわしさすら醸す声――つまり、ラップトップに映し出される波形を凝視し、計算することでは決して導き出すことの出来ない、自分達の生み出す楽曲そのものへの、絶対的な信頼が、この作品にはある。音楽を生み出すことへの信念以上に、そこには楽しさが満ちている。そう、これが聴きたかった。（唐沢真佐子）



はなんだか、『ダンス復興!』みたいなことになってるみたいだよ（笑）。な、お前、最近、よくプロディジー聴いてるだろ」

ジェイミー「うん（笑）」

アレックス「こいつはプロディジーで、他の連中はなんでか知らないけど、古い2ステップもの、ガラージを聴いてるんだよね。ソー・ソリッド・クルーとか」

ジェイミー「うん。変なのをね」

アレックス「きっと、僕ら、そういうのに影響受けたりするんだろうな（笑）。ね、日本じゃ、ソー・ソリッド・クルーって、みんな、聴いたりしてた?」

●う〜ん、UKガラージをチェックしてた連中は、なんとか知ってるっていう程度かな。

アレックス「日本に来たことはあるの?」

●ないない（笑）。

アレックス「入れてもらえないんだろうな」

ジェイミー「だって、今一人、刑務所にいるだろ? 誰かを撃ってさ」

●だね。じゃあ、“ア・サータン・ロマンス”を聴いたりする限りだと、君達って、所謂インディ・キッズにだってなれただろうし、チャヴズとか呼ばれる、それこそソー・ソリッド・クルーに夢中になるようなトライブにもなれたと思うんだけど。ただ、自分達は、どの時点で、どうなる道を選んだと思う?

アレックス「どうかなあ。僕らは一度も、そういうトライブみたいなのに属してなかったんだよね」

ジェイミー「うん。僕らは、ただ僕らでいただけ」

アレックス「そうだね。そういう境界を引いたりはしなかった。実際、あの曲が言おうとしてるのも、そういうことだったりするから。つまり、『AかBかってことじゃないんだ』ってこと。XかYじゃない（笑）。だろ? だって、それっぽい格好をしたキッズだからって、1種類の音楽にハマってるわけでもないし。前は、僕も、ソー・ソリッド・クルー聴いてたしね。だから、そういうところに入れられても、おかしくなかったんだけど」

ジェイミー「でも、俺は聴いてなかった」

アレックス「うん、つまり、そういうこと。個人ってことなんだよ。ま、僕がすごく好きだったのも、1曲だけなんだけど。あれ、ヒットしただろ? “21セカンズ”。でも、あれは最高だったじゃん!」

●俺もあの曲は、かなり好きだった。

アレックス「だから、結局、僕らの場合は、いつだって、一つのものにハマってなかったっていうか」

●イギリスもそうだと思うんだけど、日本では音楽から何から、正直、辟易するくらい、トライブが細分化されてるんだよね。そういう状況に対しては、どう?

アレックス「う〜ん、でも、昔ほどひどくはないんじゃないかな。70年代とかは、もっとみんな、トライブになってたっていうか」

ジェイミー「うん、モッズとか、ロッカーズとか」

アレックス「ただ、みんながそういう感じだったっていうのは、むしろクールな気もするよね。今はあんまりそういうんじゃないだろ? ファッションでも何でも、全部置き換えられたり、ミックスされたりしてるからね」

ジェイミー「まあ、ハードコアなインディ・キッズみたいなのは、実際、いるけどな」

アレックス「でも、インディにしたって、たくさん枝分かれしてるしさ。それにみんな、なんかのトライブのふりをしたりするだろ? 服とか、それっぽく見える方法は沢山あるんだけど、でも、別にホントはそうじゃないっていう。たぶん、僕らは、そんな風にならないようにしてるんだと思う。出来るだけね」

●ただ、トライブって、それを代表するアイコンがトライブ自体の方向性を定義するところってあると思うんだよね。例えば、アイコンとなるバンドが折衷的だったりすると、トライブに属してるキッズもそうなるし。

アレックス「あ、それはわかるな」

●だから、今後、今あるトライブがどんな風になっていくかは、君達にかかってる部分も大きいと思う。

アレックス「うん。確かに言えるかもね。実際、僕らが、君の言う折衷的だからこそ、僕らしくいられてるんだとは思うんだけど。だから、まあ、そういう意味で、僕らの後に続く子達もいるんだろうけど。でも、その、自分達のスタイルが真似されるって考え自体が、すごく居心地が悪いんだよね〜。アイコンになるっていうのが」

●わかるわかる（苦笑）。

アレックス「でも、今のところ、誰も僕らがどこに行くかわかんないから、そういう存在にならないですむっていうか。誰も、僕らがやることを予想出来ないから」

●うん、そうだね。それは、まさにそう。

アレックス「ね、君達の雑誌、“ブルーにこんがらがったガールズ&ボーイズのための雑誌”なの? どういう意味?」

●“ブルーにこんがらがった”っていうのが、ボブ・ディランの曲のタイトルからの引用。

アレックス「あ、そうなんだ。で、ブルーにこんがらがったボーイズ&ガールズのための雑誌なんだ。へえ。クールじゃん!! なんか、学校にいた時みたい（笑）」

●そうだ、これは訊いておかなきゃ。“ザ・ヴュー・フロム・ジ・アフタヌーン”の最後のラインの意味がわかんないんだけど。「You can pour your heart out around 3 o'clock／When the 2 for 1's undone the writers block」ってところ、教えてくれない?

アレックス「オッケー。これは男の子ってのは、ソースに浸かってると――」

ジェイミー「酒を飲んでるってことね」

僕らが最初に観たバンドは、D4か、ヴァインズのどっちかだと思う――友達のバンドとかを除くとね。大昔、ヴァインズのライヴの後、会場の外でクレイグに会ったことがあって、サインしてもらったんだ。彼が“クレイグ”って、僕のジーンズに書いてくれて。で、その周りに、いっぱい絵を描いたりしてね。っていうのも、クレイグ・ニコルスが、自分のジーンズに絵を描いてるのを見て、僕も真似したんだよ

アレックス「そう、酒を飲んでると、女の子に何か言う時に、詩的になる勇気が出るってこと。で、その勇気のモトっていうのが、“2フォー1”なんだけど。“2フォー1”っていうの、わかる?」

●要は、半額ってことだとは思うんだけど、まさにここがイマイチわかんなかった部分なんだけど。

アレックス「これは、バーにいる時間帯によって、1杯分の値段で2杯飲めることなんだ。だから、安く酔っ払えるわけ。日本には“2フォー1”ってないの?」

●たぶん、ないと思う。

ジェイミー「どこの国にもないよ」

アレックス「イギリスっぽいよな。しけたバーで(笑)」

ジェイミー「イギリス人みたいに飲む国なんてないぜ」

アレックス「で、男ってのは、たとえ言いたいことがあっても、午後2時頃には、彼女に何をどんな風に書いていいかわからないじゃん(と、携帯メールを打つしぐさ)」

ジェイミー「でも、夜になって、酔っ払っうと、勇気を奮えるんだ」

アレックス「そう、彼女に何がしたいか、言えるようになる。『君のそばにいたい』とか、普段はとても言えないような言葉を使えるようになるんだ(笑)」

●なるほどね(笑)。じゃあ、アルバムの中には、いろんな経験があるけど、これは4人の経験をかき集めたところがあるの? 中には、想像のものもある?

アレックス「いや、これは全部リアルな体験」

●じゃあ、誰かが一度は経験したこと?

アレックス「っていうか、何度も経験したこと(笑)」

●何度も?

アレックス「そう。僕ら4人って、ホントこんな感じだったんだよ(笑)。ライヴ行ったり、一緒に夜遊んだり、ま、もちろん、そういうことじゃない曲もあるけどね。出会った人のこととか、もっと昔の体験とか。例えば、“ライオット・ヴァン”とかは、僕らが14歳とかの時のことを歌ってて。あれ、もっと若かったっけ?」

ジェイミー「たぶんな」

アレックス「じゃあ、8歳とか(笑)」

●(笑)じゃあ、アルバムに収められた曲の中の体験で、一番思い出したくない体験っていうと、どれ?

アレックス「どうかなあ。う〜ん、そんな風には考えられないかな。あ、でも、“ユー・プロバブリー・クドゥント・シー・フォー・ザ・ライツ〜”は、そうかも。あの子はモノに出来なかったから(笑)」

ジェイミー「だな(笑)」

●“フロム・ザ・リッツ・トゥ・ザ・ラブル”は?

アレックス「うん、あれも(クラブから)叩き出された曲だし、そうかもね(笑)。だけど、今でも追い出されたりするしな、俺達」

ジェイミー「そうなんだよな〜(笑)」

アレックス「まあ、でも、僕らがこうなってからは、入れるようにはなってきたんだけど、でも、時々追い返されるんだよな(笑)」

●じゃあ、今の自分達から、一番距離がある曲は?

アレックス「“マーディ・バム”かな。歌ってても、すっごく昔のことに思えるっていうか。あとは、“(アイ・ベット・ユー・ルック・グッド・オン・ザ・)ダンスフロア”も、そう感じることがあるね。あの曲をひねり出したのが、遠い昔みたいに思えるんだ。でも、いいパフォーマンスをするには、やっぱりその曲を書いた時のことを思い出すべきなんだよね。ただ、この辺りの曲は、ちょっとそこが難しくなってきてる」

●そうだ、訊き忘れるとこだった。『オブザーヴァー』で読んだんだけど、君達が一番最初にライヴを観たバンドが、ヴァインズだっていうのは、本当の話?

アレックス「うん。D4か、ヴァインズのどっちかだと思う――友達のバンドとかを除くとね」

●当時と比べて、自分達は変わったと思う?

アレックス「ちょっとはね。だって、当時、16歳とかだったから。ちょっとは大人になった。だって、あの時の俺達って、裂けたジーンズとか、はいてたから(笑)」

ジェイミー「そうそうそう、あの頃って、裂けたジーンズがクールだったんだよな。お前の、覚えてるよ(笑)」

アレックス「ああ、腿の辺りに、いっぱい絵が描いてあるヤツね。ていうのも、クレイグ・ニコルスが自分のジーンズに絵を描いてるのを見て、僕も真似したんだよ。木とか描いてさ。でも、僕、絵がうまくないから、かなりひどくて。でも、当時はそれがクールだったんだ。だから、みんなに羨ましがられて。これ、ホントの話(笑)」

ジェイミー「俺も、最悪のリップド・ジーンズ、何本か持ってたな(笑)」

アレックス「最初から裂けてるやつだろ? あれは嫌いだった。『自分で破いたやつが本物だ』って思ってたからさ(笑)。だから、いつも自分でやってたんだよね。バッジ、いっぱい付けてるのもあったし」

●(笑)実は、僕ら、先週、オーストラリアでクレイグの取材をやったんだけど。

アレックス「会いに行ったの? クールじゃん!」

●で、クレイグはどうにか、いろんなことをもう一回やり始めた最中なんだけど、まだ痛々しくてさ。彼の場合は、病気だって言われてるけど、やっぱりいろんなプレッシャーがそうさせた部分はあると思うんだよね。

アレックス「わかるよ。自分もあんな風になったりするんじゃないかって、心配したりもするしね。あのさ、僕、大昔、ヴァインズのライヴの後、会場の外で彼に会ったことがあってさ。その時、サインしてもらったんだ」

●サインもらったの?

アレックス「そうだ! さっき言ってたジーンズが、それだよ! 僕のジーンズに、彼が“クレイグ”って書いてくれてさ。そっから、自分でも、いろんな絵を描き始めたんだ。そうだ、そうだ。でも、僕らがロック・スターとやらになってからは、まだ会ってないんだよな」

ジェイミー「まあ、彼、もう出てこなくなったから」

アレックス「でも、想像するに、みんな彼の行動にちょっと過剰反応したんだろうな。一つでも変なところを見つけたら、みんなそこしか見なくなるんだよね。彼が普通にいる時でさえ、みんなそんな風に彼を見るようになって。それは想像出来る。俺達も、いろんなことを体験するんだろうな。でも、僕は自分がおかしくなるんじゃないかとかは考えないようにしてる。正直な話」

ジェイミー「そうなったら、妙だろうな」

アレックス「うん。だけど、考えると、おかしくなった時って、『自分はおかしい』とはわかんなくなるんだろうし。だから、それは怖いけど。でも、クレイグって、いいソングライターだよね」

ジェイミー「うん」

アレックス「いいアーティストだ」

●新しいアルバムはもう聴いた?

アレックス「いや、まだ。君は聴いたの?」

●うん。

アレックス「いい?」

●いいよ。

アレックス「クール!」

●まあ、いろいろと微妙なところはあるけど。

ジェイミー「いつ出るの?」

●日本では、ちょうど出たばかりかな。

アレックス「マジで? うわあ!」

ジェイミー「クール!」

アレックス「買わなきゃ! ね、アルバムはどう? 説明出来る?」

●13曲入ってて、31分しかなくて。最後の曲が6分で、すごくサイケデリックな曲なんだよね。で、『自分は今いる場所から、どこか遠くに行くんだ』って歌ってる。で、残りの12曲は全部1分半か、2分くらいで。悲しみとイラつきと、自分を責めてる曲が大半。

アレックス「なるほどね」

●だから、ちょっと痛々しいんだよね。

アレックス「でも、クールじゃん」

●うん、もちろん。でも、君達が彼のこと好きだって言ったら、すごく喜んでた。

アレックス「あ、言ったの?! 僕もなんか、理解出来るんだ。きっと彼、なんか変な気持ちになってきたんだろうなって想像出来る。で、彼のいた状況がそれをどんどん強めていったんだろうなって。僕らは、まだそこまで行ってないっていうか……」

ジェイミー「ヴァインズは、かなりアメリカでもビッグだったしな」

アレックス「うん。そういうことに目が回って、ちょっと変になってくのは想像出来るんだ。わかるな」

●そうだね、アメリカはキツいから。

アレックス「うん、絶対そうだね。あのさ、なんか、このインタヴュー、いろいろためになったよ(笑)」

THIS MONTH'S SNOOZER : KAISER CHIEFS pic by ERI OKAMOTO

SUBTERRANEAN HOMESICK BLUES

すべてのブルーにこんがらがったベッドルームのために

いろいろと迷った末に、我々はヴァインズを今号のカヴァーにすることに決めた。我々が躊躇した理由は、たったひとつ。当初は、いつまで経っても、果たしてクレイグ・ニコルスがインタヴューを行ったりすることが出来る状態なのかどうかさえも、誰にもわからなかったからだ。

だから、レコード会社の担当者共々、我々は、根気強くバンド・サイドからの連絡を待った。その後、ようやく日本に関しては、「これまで実際にクレイグと会ったことがあって、クレイグがリラックス出来る相手となら、可能、だが、それも最小限の数で」という返答が来る。そこで、本誌の唐沢と『ロッキング・オン』誌の坂本女史に白羽の矢が当たり、それぞれ国際電話を通じて、メンバー三人との会話がセッティングされた。だが、その前後で、どうやら英国の『オブザーヴァー』誌の記者が、シドニーにある彼らのマネジメント・オフィスまで出向いていって、インタヴューを行うらしいことが判明。現在のクレイグが、そんな風に直接人に会える状態ならば、会って話せるに越したことはない。そこで、シドニーまで出向くことに踏み切ったというわけだ。

ただ、実際にシドニーまで出かけていったのは、編集部の唐沢と萩原の二人なので、僕は直接、クレイグには会ってはいない。だが、彼女達が持ち帰ってきたデジカメの映像とポラロイド写真を見るかぎりでは、彼はかつての、会った人間誰もが夢中になってしまうような、あのキュートさを失ってしまっているように思えた。笑顔はどこか虚ろで、会話はたどたどしい。実際、いまだクレイグ・ニコルスの病状は万全とはいいがたく、今後もプロモーションらしいプロモーションは行えない状態らしい。本文記事からは割愛した、彼らのマネージャー、アンディ・ケリーの発言から少し引用しておこう。

「彼が抱えている病気というのは、一生付き合っていかなきゃいけないものなんだ。だからこそ、自分のライフスタイルをどうコントロールするかが重要になる。そこで大きな部分を占めるのが、生活に規則性を持つことなんだよ。つまり、これから先、近い将来に何が起きるのか、クレイグが知っていて、驚いたりしないことが大切なんだ。例えば、インタヴューは、必ずこのオフィスで、しかも、必ず2時に始まる。わかるよね？　ルーティンを作ることが大事なんだよ。例えば、毎日、レコーディングは必ず1時に始まるとかね。そして、取材の時は、この裏庭か、もう一つの部屋のどっちかじゃなきゃならないし、そこには必ず灰皿と飲み物を置いて、常にまったく同じ状態にするんだ。おそらく彼が『もう完全に治った』という状態になることはないんだよ。だから、僕らとしては、いい状態を保持することが何よりも重要なんだ。おそらくバンドにとっても、我々マネジメントにとっても、一番のチャレンジは、流されないってことだと思う。『いくつかインタヴューをやってみたけど、なんか、クレイグも調子がよさそうじゃないか。じゃあ、もっと取材をやろう』と言われても、『この分じゃ、ツアーが出来るんじゃないか』と言われても――そうやって、“たぶん”を少しずつ受け入れていくようになってしまったら、いつか『半年ツアーをやれるんじゃないか』って話になってしまう。でも、それは無理なんだ」。

おそらく欧米では、ヴァインズの3rdアルバム『ヴィジョン・ヴァリィ』は、大々的な成功を収めることはないだろう。海外のプレスは、概ねアルバムに対して、好意的なようだが――いや、〈ピッチフォーク〉は違った。わざわざマルクスの有名な言葉、「歴史は繰り返す。一度目は悲劇として、二度目は喜劇として」を引用して、コキ降ろしてやがった。あいつら、ここ2年の間に、アーケイド・ファイアとクラップ・ユア・ハンズ・セイ・ヤーをブレイクさせたことで、完全に調子に乗ってやがる。だが、俺はあのレヴューを書いたヤツの名前を絶対に忘れない。デヴィッド・ラポーザ、お前だ。

申し訳ない。話が逸れた。通常、ツアーもインタヴューもラジオ出演もやらないバンドに対して、レコード会社はプロモーションのための予算は計上しない。しかも、当初、バンドがアルバムをプロモーションするために差し出した“ドント・リッスン・トゥ・ザ・レディオ”と“グロス・アウト”の2曲は、そもそもラジオではほとんどかからない運命を持った曲でもある。“グロス・アウト”の場合は、1分18秒しかないことがネックだ。何でも曲の長さが1分30

illustration by MOTOFUMI NAKASHIMA

秒に満たない場合は、オン・エア回数がカウントされないらしく、だから、もし仮に、いくらオン・エアされたとしても、その曲がチャートに上ることはない。そうなると、必然的にラジオ局がその曲をかけることはなくなるし、レコード会社も一切プロモーションしなくなる。そして、“ドント・リッスン・トゥ・ザ・レディオ”に関して言えば、世界中のラジオ局において、この「ラジオなんか聴くな」というタイトルが最大のネックになっている。アンディ・ケリーの発言をもう一度、引用しておこう。

「だって、『じゃあ、これを最初のシングルにしよう』って言ったのは、キャピトルUSだったんだよ? 僕は『ミックスが終わったら、他の曲も聴かせようか?』って言ったんだけど、『いや、これでいい』ってね。で、その時点で僕にはそうなるのがわかってたんだけど、1週間後に電話がかかってきてね。『あのシングルで変えなきゃいけないところがある』と言われたんだ。『タイトルを変えなきゃいけない』ってね(笑)。それで2週間ほどモメて、ついに向こうが折れた。でも、アメリカでは今、苦戦してるんだ。ただ、クレイグを知ってたらわかると思うんだけど、あの曲は、彼がラジオ局ともめたこととか、そういう出来事とはまったく無関係なんだよ。勿論、彼が曲で復讐してるって思う人達がいるのもわかるけど。そうじゃない。僕にはわかってる」。

ただ、実際には、おそらくここ日本でも、この曲がラジオから流れることはほとんどないだろう。実際、僕自身、知人から、彼の知っている日本のラジオ業界にいる人間が、この“ドント・リッスン・トゥ・ザ・レディオ”というタイトルを知って、「ありえない」とかヌカしたいう話を聴いた。日本のレコード会社も、ラジオ局にヴァインズの『ヴィジョン・ヴァリィ』をプロモートする際は、そうした誤解に基づいた面倒ないざこざを避けるために、別の曲を候補としてピック・アップしているようだ。

だが、それにしても、かなり下らない話だと思う。だって、“ドント・リッスン・トゥ・ザ・レディオ”は、そんなこととは無関係に、ただひたすら悲しい歌なのだ。これは、また再びシドニーの自分の部屋にひきこもってしまったクレイグが、もう一度外界に出て、自分以外の人間とコミュニケーションを取るべきか、ずっとこのまま一人でいるべきか、自問自答する様子がモチーフになっている。外界に対する恐怖——また再び、何かしら手痛い失態をしでかすことの恐怖から、彼はラジオや電話やTVといった自分と外界を繋ぐメディアからの誘惑にすべて耳を塞ごうとする。そうして、「もしかしたら、前とは違って、うまくいくかもしれない」という希望を自ら握りつぶすことで、なんとか正気を保とうとする。そして、この曲のリフレインは、クレイグの頭の中での自問自答を、実際にクレイグのヴォーカルとコーラスがかけ合う作りになっているのだ。「今日は外に出るのはやめとくよ」「ああ、そうしなよ」「今日は外に出るのはやめとくよ」「ああ、その方がいい」。本当に悲しい曲だ。

『ヴィジョン・ヴァリィ』は、クレイグ・ニコルスの天性のメロディ・メイカーとしての才能——本当にシンプルなギター・リフだけしかない曲なのに、一度聴いたら、絶対に忘れないメロディを作ってしまう才能、そして、ほんの短いセンテンスの中で、希望と絶望の間で揺れ動く気持ちをどんな誰よりも見事に表現してしまう才能を、あますことなく証明するアルバムだ。くそ、もう詳しく書く場所がないや。いいや、また今度、書く。ああ、何度でも書いてやる。“ドント・リッスン・トゥ・ザ・レディオ”というタイトルだけで、「ありえない」とかヌカした馬鹿共がこの世から永遠に消え失せるまで、これから先、何度でも書き続けてやる。

そんなこんなで、いろんなやるせないことばかりの中で、今号のインタヴュー記事のために、大阪で取材したアークティク・モンキーズの二人との会話には、かなり救われた。詳しくは、彼らのインタヴューを読んで欲しい。それにしても、ヴァインズの話になると、いきなり目が輝き出し、喜々として、彼らについて語り出したアレックス・ターナーの表情が最高だった。「クール!!」だってよ。僕はホント嬉しかった。こうやって、ちゃんとわかってるヤツがいる。相手がアレックス・ターナーだからというわけでもない。ヴァインズのことをこんなにも愛してるヤツがいる。もうそれだけで十分だった。 (田中宗一郎)

PRESENTS FROM SNOOZER *056

今月のプレゼントです。P.224後ろの綴じ込みハガキに必要事項、希望のプレゼント番号を明記の上、スヌーザー編集部までお送りください。なお、チケット・プレゼントにご応募される場合には、希望の公演日と会場を必ず明記して下さい。また、締め切りの確認をお忘れなく。チケット以外のプレゼントを希望の場合には、5月30日（火）までご応募いただけます。「LIVE REVIEW」や「READER'S FORUM」等、誌面でおハガキを採用させていただいた方から優先的にプレゼントさせていただきます。ただし、掲載された方の中で希望プレゼントの重複があった場合には、ご希望にそえない場合もあります。あらかじめご了承下さい。たくさんのご応募、お待ちしております。

■i-WARP

英国電子音楽春の祭典〈i-WARP〉!! がっつりディープに踊りましょう。5月20日必着でご応募下さい。また、オールナイト公演につき、応募年齢制限にご注意下さい。［公演日］5月26日（金）新木場スタジオコースト／5月27日（土）大阪FANJ TWICE／5月28日（日）名古屋CLUB RADIX［問］ビートインク tel.03-5766-6571

①i-WARPイヴェントチケット――――各公演2組4名

■THE VINES

瀕死の淵から蘇ったザ・ヴァインズ、世界最長インタヴュー、いかがだったでしょう。鬼レアなサイン入りポラは、クレイグ激太りの現実を受け止められる方限定で。やはり耐えられないという方は、Tシャツ着てやって下さいませ。

②サイン入りポラロイド――――2名

③イラスト入りTシャツ（黒／M、レディースM）――3名

（編集部／東芝EMI提供）

■THE WHITE STRIPES

これまたレアもの放出です。ほぼ店頭には流出しておりません、『ゲット・ビハインド・ミー・サタン』の変わりジャケ12インチに、非常に見えにくいですがメグとジャックのサインまで入ってます。20年後、お宝鑑定団行き確実の逸品です。一生涯、手元で大切にして下さいね、マジで!

④サイン入り12インチ・ヴァイナル――――1名

（編集部提供）

■FRANZ FERDINAND

4人4様の愛と情熱の爆笑インタヴュー、楽しんでいただけましたでしょうか? そんな世界で一番クールな変人4人のサインが揃ったシングルを大放出。しかも二大名曲、「テイク・ミー・アウト」と、「ドゥ・ユー・ウォント・トゥ」でございます! どちらが当たるかは到着までのお楽しみ。

⑤サイン入りシングルCD――――2名

（編集部提供）

■ARCTIC MONKEYS

さてこちらは、今、世界で一番有名なニキビ面4人衆。来日記念ですものね、編集部も実は隠し持っていた最後のサイン入りシングルをプレゼントしちゃいます。前号で惜しくもハズレた方も、これが正真正銘ラスト・チャンス。勿論、「アイ・ベット・ユー・ルック・グッド〜」ですよ。

⑥サイン入りシングル――――1名

（編集部提供）

■MASSIVE ATTACK

大人なあなたに、あるいは夏を前に新たな装いアイテムをお探しの方には、こちらをどうぞ。〈サマーソニック〉での来日も決定したマッシヴ・アタック、ベスト・アルバムのアートワークを模したTシャツです。男女ともサイズございますので、ご夫婦での応募なんかもお待ちしております。

⑦ロゴ入りTシャツ（黒／L、Girls M）――――2名

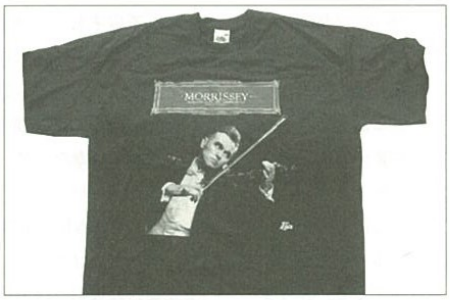
（東芝EMI提供）

■THE KOOKS

ハロー、巻き毛のかわいこちゃん! というわけで、ザ・クークスからも、なんと1stアルバム『インサイド・イン／インサイド・アウト』にサインをゲットしちゃいました。何故か臨時のベーシストもサインしてる、ある意味、かなりレアな一枚です。

⑧サイン入りアルバム――――1名

（編集部提供）



■MORRISSEY

巷のロックTシャツ・ブームは加熱するばかりですが、本当にエッジーなお洒落野郎は、ここまでチャレンジしましょう。モリシー御大、大傑作の最新作のアートワークをびっちりプリントしましたTシャツです。さあ、難易度の高い一枚を着こなせるのは、一体誰だ? 我こそはという貴方に。

⑨イラスト入りTシャツ（黒／M）――――1名

（BMG提供）

■THE ORDINARY BOYS

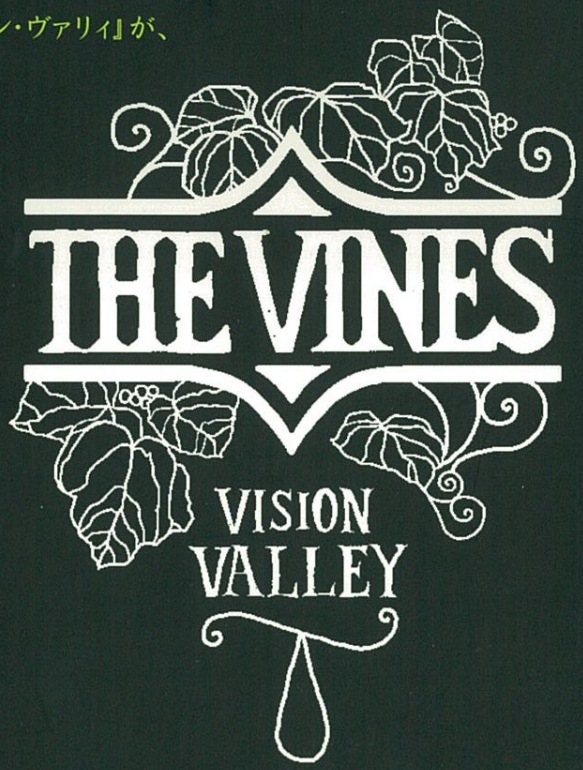
遂に決定、プレストンご成婚! セレブ婚を記念してレアものプレゼントしちゃいます。前髪びっちり独身時代の記念碑、デビュー・シングル「メイビー・サムデイ」と、新ラインナップの4人が写ったポラ、それぞれサイン入りで。

⑩サイン入りシングル――――1名

⑪サイン入りポラロイド――――5名

（編集部提供）

ザ・ヴァインズの音楽史を駆け抜ける
ジェット・コースターのようなキャリアは、
まだ終わりを告げていなかった。
その事実を本アルバム『ヴィジョン・ヴァリィ』が、
誰よりも雄弁に語る。



ザ・ヴァインズ生還のブラック・アルバム

ザ・ヴァインズ | ヴィジョン・ヴァリィ

OUT NOW TOCP-66536
¥2,548(tax in)

日本盤のみの特典!!
★メンバーによるインタビュー映像収録(CD-EXTRA)
★オフィシャルTシャツプレゼント応募券付

同時発売 期間限定 スペシャルプライス盤登場! ¥1,980(税込)
●1stアルバム「ハイリー・イヴォルヴド」TOCP-53711 ●2ndアルバム「ウィニング・デイズ」TOCP-53712

「着うた®」配信中!
http://intl.jp/

TOSHIBA-EMI LIMITED

snoozer [スヌーザー] 第三種郵便物承認 2006年6月18日発行(隔数月1回18日発行)第10巻第3号(通巻65号) 発行人・孫 素邦 編集人・田中宗一郎 発行・株式会社リトル・モア 〒151-005 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-56-6

定価730円 本体695円 雑誌 15475-06 Printed in Japan

4910154750668
00695